

ヨコスト湿原自然環境
調査報告書



平成23年1月

白老町

はじめに

ヨコスト湿原は、北海道自然環境保全指針に基づく「すぐれた自然地域」に指定されているとともに、北海道湿原保全マスタープランでは「ポロト・ヨコスト湿原群」としてリストアップされています。

平成22年は、国連が生物多様性に関する認識を高めるために定めた「国際生物多様年」にあたり、名古屋で生物多様性条約を締結したCOP10が開催されるなど、生物多様性の保全に関心が集まっています。

平成22年7月に策定された北海道生物多様性保全計画において、湿原は、これまで主に希少な動植物の重要な生息・生育地として注目されてきましたが、近年では、高い保水力による河川の流量や地域の気候の変動を緩和する機能、流入する水に含まれている土砂や汚濁物を吸収、浄化する機能、炭素を貯蔵する機能などを持ち合わせる重要な生態系として見直されており、その公益的機能の重要性が再認識されているところです。

本調査は、白老町環境基本計画に基づき、ヨコスト湿原の現状を把握する必要があることから、町内の自然保護団体と協力して湿原に生息している植物・鳥類・昆虫類などの現状について自然環境調査を実施したもので、今後のヨコスト湿原の保全・活用方法を検討するための基礎資料とするものです。

目 次

第1章 事業概要

I. 事業概要	1
II. 調査方針	1
1. 調査方法	1
2. 調査体制	1
3. 調査内容	2
4. 調査報告	2

第2章 調査結果

I. 調査地の概要	3
II. 水質調査	5
III. 水位調査	6
IV. 植物の調査	8
1. 調査にあたって	8
2. 調査の方法	8
3. 調査結果	8
4. 植物群落等の概要（観察記）	10
(1) 海浜植物群落	10
(2) 海岸草原	10
(3) ハマナス群落	11
(4) アカネムグラ・ヒメシダ群落	12
(5) ナガボノシロワレモコウ・ヒメシダ群落	12
(6) タチギボウシ・ヒメシダ群落	13
(7) ホザキシモツケ・ヒメシダ群落	13
(8) アゼスゲ・アオコウガイゼキショウ群落	14
(9) ホザキシモツケ・ヨシ群落	14
(10) クサヨシ・イワノガリヤス群落	15
(11) ヨシ群落	15
(12) ヨコスト川沼沢湿原植物群落	16
(13) 石像下の沼	17
(14) ズミ・エゾノコリンゴ群落	18
(15) ハンノキ林	19
(16) ノリウツギ群落	20
(17) ワタゲカマツカ・エゾクロウメモドキ群落	20
(18) ミズナラ・オオクマザサ群落	20
(19) オオクマザサ群落	20
(20) 排水路・人工の沼	21
5. 注目したい群落等	21
6. 植物がつくる景観	21

7. ヨコスト湿原の植物とエゾシカ	22
8. 感想と考察	22
環境省および北海道のレッドリストカテゴリー (参考資料)	23
植生図	24
植物目録	25
V. 鳥類の調査	39
はじめに	39
1. 観察された鳥類	39
2. 野鳥にとっての湿原環境	42
3. 営巣・繁殖している鳥	43
4. 海と陸の往来	44
5. 渡りの中継地	44
6. 希少種	45
終わりに	45
VI. 昆虫類の調査	46
1. 調査方法	46
2. 調査結果	46
3. 考察	47
昆虫類目録	48
第3章 まとめ	
I. 考察	52
添付資料 (航空写真)	53
II. まとめ	56
III. 引用及び参考文献等	57
IVヨコスト湿原写真集	photo-1
植物	photo-1
野鳥	photo-12
昆虫	photo-18

第1章 事業概要

I. 事業概要

1. 目的

白老町環境基本計画の重点施策として、ヨコスト湿原の保全策の検討を平成23年度までに実施することとしていることから、これまで白老町内の自然環境団体が独自に調査したヨコスト湿原の自然環境調査結果を基に、必要な補足調査を実施して「ヨコスト湿原自然環境調査報告書」をとりまとめ、ヨコスト湿原の保全の考え方を整理し、具体策について検討するための基礎資料とする。

2. 事業名

ヨコスト湿原自然環境調査

3. 実施期間

平成22年6月 ～ 11月

4. 実施機関

白老町 生活福祉部生活環境課
白老町環境町民会議
白老町自然環境団体等

5. 調査地域

白老町ヨコスト湿原(資料1「位置図」参照)

6. 調査項目

ヨコスト湿原に関する水質(ポロト湖を含む)、植物、鳥類、昆虫

II. 調査方針

1. 調査方法

(1) 情報収集

これまでに自然環境団体等がヨコスト湿原に関する自然環境調査等の資料を収集する。

(2) 補足調査

情報収集で得た情報を基に補足調査の必要がある調査内容を整理し、調査を実施する。

2. 調査体制

白老町内等の自然環境に精通している次の住民に協力を依頼した

(1) 調査担当

氏名	所属	担当
相吉正亮	白老の自然を考える会	昆虫・まとめ
有田勝彦	めむの会	植物
窪田文子	めむの会	植物

齊藤 勝	めむの会	植物
坂本 清司	めむの会	植物・まとめ
菅原 弘行	写真家	鳥類
谷口 勇五郎	いぶり自然ガイドの会	植物・昆虫
中野 嘉陽	緑と水の保全協議会	鳥類・まとめ
成田 勝美	めむの会	植物
南 誠司	めむの会(準会員)	植物
宗広 光明	いぶり自然ガイドの会	植物
鈴木 央夏	白老東高校教諭	植物
阿部 善人	白老東高校2年(理科同好会)	植物

札幌市立大学 矢部和夫先生に、コケ植物の同定などで大変お世話になりました。宗広光明氏には、カヤツリグサやイネ科などの植物の同定のご指導いただき、調査方法や報告に関しても資料の提供やご助言をいただきました。両氏に心より厚くお礼申し上げます。

(2) 事務局

氏名	所属	担当
小野寺 卓司	白老町生活福祉部生活環境課	水質
山本 玲子	白老町生活福祉部生活環境課	総括

3. 調査内容

(1) 情報収集

次の資料を中心にヨコスト湿原に関する資料を収集する。

- ① しらおいの自然(1996年版) しらおい水と緑のネットワーク
- ② しらおいの自然(1998年版) しらおい水と緑にネットワーク
- ③ 「すぐれた自然地域」自然環境調査報告書[道央・道南地域](平成5年5月)
北海道環境科学研究センター
- ④ 海と緑の健康地域づくり水深計画書(平成9年度) 白老町
- ⑤ 北海道の湖沼 改訂版(2005) 北海道環境科学研究センター

(2) 補足調査

情報収集で得た情報を基に補足調査の必要がある調査内容を整理したところ、次の項目の調査を実施した。

- ① 植物
- ② 鳥類
- ③ 昆虫類

4. 調査報告

情報収集及び補足調査で得た結果をとりまとめて「ヨコスト湿原自然環境調査報告書」としてとりまとめる。

報告書は、製本及び電子ファイルで保管する。

第2章 調査結果

I. 調査地の概要

白老町の市街地の東側、太平洋に面した地域にヨコスト湿原が広がっている。面積は 33ha 余りである。ヨコストとは、アイヌ語のヨコウシトー（獲物のたくさんある沼）が変化したものであるという。ポロト自然休養林を源流とし、ポロト湖を経て流入するウツナイ川と、北東から流れるヨコスト川が湿原の東の端で合流している。海岸線に沿って砂丘があり、その背後にはヨコスト川につながる帯状の沼沢湿原と、かつて牛馬の放牧地であったという草原や湿原が入り組んで広がっている。

湿原のほぼ中央を南北に国道 36 号線が貫いている。国道の西側の西端と、旧国道沿いの住宅地と白老東高校の裏手には、小さな池沼群と水路と林が海岸線とほぼ平行して並んでいる。それらと国道との間には、ヨシやホザキシモツケが生える湿原が広がり、北東部にはハンノキ等の林がある多様な区域である。1962 年の航空写真には、複雑に蛇行するウツナイ川と思われる川と、大きく蛇行して沼のように広いヨコスト川が写っている。西の端には 4 列の沼が見え、現在も残っている沼と思われる。

軽石層の分布範囲を知るために、海岸から国道沿いの数箇所で土壌を調べてみた。海側の砂丘列とヨコスト川付近だけが主に砂で、他は地表から約 10~20 cm は腐植土、或いは泥があり、その下は軽石の層であった。軽石は有珠山のもので、1663 年の大噴火によるものと言われる。白老の海岸付近では 1m にもなるという。調査した地点には泥炭層らしきものは確認できなかった。

後退する海や蛇行する川により形成された沼や複雑な起伏を、有珠火山の軽石が覆い現在に至ったものと推測される。厚さ数十cmの軽石が当時の人や動植物にどんな影響を与えたのか、又その後の 350 年という時間が、動物のように移動できない植物にとってどのような意味があったのだろうか。

ヨコスト湿原は、社台小学校がボランティアの協力を得ながら毎年自然学習の場として利用している。地元のグループによる植物観察会も行われている。たまに、札幌などの自然や植物を愛する団体が訪れ、野鳥の撮影や観察に訪れる人もいる。残念な事だが、一部の心ない人のごみ捨て場でもあるようだ。

「北海道自然環境保全指針」に基づく「すぐれた自然地域」に指定されており「北海道湿原保全マスタープラン」においても、リストアップされている。しかし、あまり知られていないようにも感じられる。

かつて白老の海岸は、虎杖浜地区の一部を除き砂浜であったが、浸食により社台川河口付近からヨコスト海岸と、白老川河口部から白老港の間、敷生川の西だけになってしまった。ヨコスト海岸が浸食された場合、背後のヨコスト湿原の自然環境に影響を及ぼすことが懸念されるため、海岸線付近に突堤を設け、その間に「養浜」することにより、安定化させる工事が試験的に行われている。国の「エコ・コースト事業」の対象で、「海と緑の健康地域（健康海岸）」にも指定されている。散歩や釣り、バーベキューなどに訪れる人が多い。毎年、町内の幾つかの

団体が清掃を行っている。

ポロト湖は、白老町の市街地の北側に位置しており、北西－南東に長い形状をしている。この湖は、海からの砂丘で取り残された海跡湖である。

ポロト湖は高度8.0m、最大水深14.0m、平均水深8.0m、湖面積0.32km²、周囲3.0km 集水域面積3.98km²の淡水湖である。

主な流入河川は、湖の長軸方向の北西端に小河川が流れ込んでいる。この流入河川の湖流入口付近は湿地帯が広がっている。流出は南東側からの小河川で、ヨコスト湿原に注いでいる。

集水域の土地利用状況は、山林や湿地帯などの自然地の割合が高く、湖の周囲は、サクラ、ミズナラ、イタヤカエデ、シラカンバ、ヤチダモなどの生い茂るポロト自然休養林が広がる。森林浴やバードウォッチングも可能で、その雰囲気の良いゆえ遊歩百選にも選ばれている。

南東側湖岸には「ポロトコタン」と呼ばれるアイヌコタンがあり、観光名所になっている。

ポロト湖の諸元

所在地	白老町若草町	最大水深	14.0m
湖心の位置	N 42° 34′	平均水深	8.0m
	E 141° 22′	周囲長	3.0km
成因	海跡湖	集水域面積	3.98km ²
高度	8.0m	集水域面積/湖面積	12.4
湖面積	0.32km ²		
湖体積	2,560千m ³	滞留時間	0.47年

II. 水質調査

1. ポロト湖

白老町では、1983年からポロト湖心において水質調査を実施しており、調査結果は表のとおりです。

ポロト湖水質調査結果

調査地点：湖心

	S58.5.9 1983	S61.9.5 1986	S62.11.20 1987	S63.6.20 1988	H1.9.14 1989	H2.10.8 1990	H3.8.30 1991	H4.9.1 1992	H5.7.29 1993	H6.7.26 1994	H7.7.28 1995	H8.8.7 1996	H9.7.31 1997	H10.7.27 1998
気温 (°C)	15.4		0.5	18.0	18.0	17.5	19.4	25.0	15.8	24.8	29.4	24.1	24.0	22.0
水温 (°C)	13.2	23.0	4.5	19.0	22.2	16.0	21.6	22.0	18.4	24.2	27.1	21.5	24.2	22.8
PH	7.2	7.6	6.2	7.6	7.1	7.2	7.8	7.3	7.3	7.5	7.7	7.7	7.8	7.8
BOD (mg/l)	2.5	2.6	2.2	0.7	1.3	0.6	2.4	1.1	2.1	1.2	0.8	1.9	2.5	2.0
COD (mg/l)	3.1	9.2	2.5	3.7	4.0	4.0	5.3	3.8	3.9	3.5	3.0	4.1	3.4	3.8
SS (mg/l)	11.0	7.6	5.0	2.0	1.0	3.0	4.2	1.8	3.0	2.0	1.0	2.4	2.4	1.8
大腸菌群数 (MPN/100)	6.0	43.0	0.0	6.8	4.5	13.0	7.0	22.0	46.0	<2	6.1	93.0	7.8	7.8
DO (mg/l)	10.1	8.6	8.0	10.2	10.8	10.7	9.5	9.8	8.7	8.6	8.6	10.2	9.4	9.9

	H11.7.27 1999	H12.8.2 2000	H13.7.23 2001	H14.7.17 2002	H15.7.18 2003	H16.7.29 2004	H17.7.28 2005	H18.7.27 2006	H19.7.25 2007	H20.7.25 2008	H21.7.29 2009			
気温 (°C)	28.0	27.0	23.0	20.0	14.0	24.0	23.0	26.0	26.8	22.0	22.9			
水温 (°C)	25.6	26.5	23.0	21.0	21.0	25.5	23.0	22.5	22.1	23.5	21.5			
PH	7.8	7.2	7.7	7.4	7.5	7.7	7.6	7.7	6.8	7.6	7.0			
BOD (mg/l)	0.5	0.7	2.5	0.7	1.4	1.0	1.8	1.5	1.0	0.6	1.6			
COD (mg/l)	4.3	4.6	3.4	4.1	3.8	3.3	4.0	3.2	3.0	4.7	5.8			
SS (mg/l)	2.2	2.4	1.9	2.0	2.2	1.4	2.5	1.6	1.0	1.0	2.2			
大腸菌群数 (MPN/100)	7.8	130.0	4.5	330.0	70.0	100.0	160.0	9.3	23.0	280.0	49.0			
DO (mg/l)	9.7	9.8	10.3	10.1	10.8	9.2	9.3	10.2	8.9	10.3	9.8			

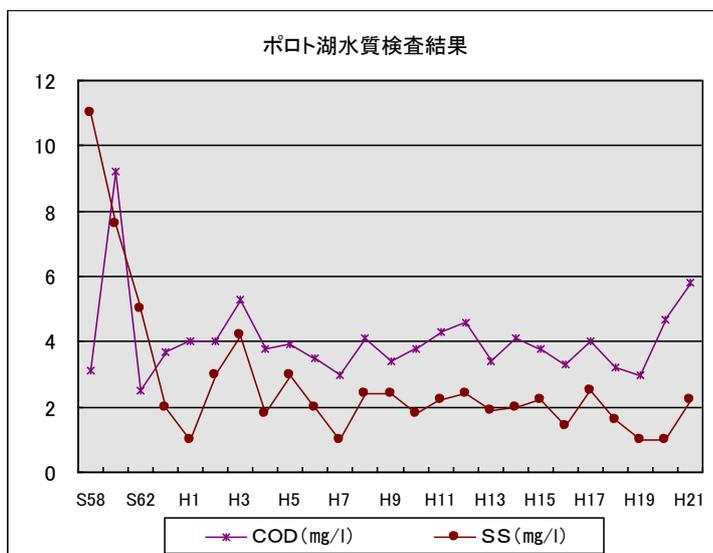
COD(化学的酸素要求量)とは、水中の有機物等を酸化剤(過マンガン酸カリウム)で酸化するとき消費される酸化剤の量を酸素の量に換算したもので、湖沼を対象に水質汚濁を示す代表的な指標です。ポロト湖においては、1986年に9.2 mg/lと最も高く、その後、4 mg/l前後を推移していたが、近年増加傾向にあります。

SS(浮遊物質)とは、水中に懸濁している直径2 mm以下の不溶性の粒子物質のことで、水の濁りや太陽光線の透過を妨げたり、ひどい場合は魚類のえらを塞ぎ、窒息死させる危険があります。ポロト湖においては、1983年に11.0 mg/lと最も高く、その後、2 mg/l前後で推移しています。

その他、大腸菌群数は、近年、概ね増加傾向にあります。

以上のことから、ポロト湖は近年水質汚濁が進んでいると考えら

れ、引き続き水質調査を実施する必要があります。

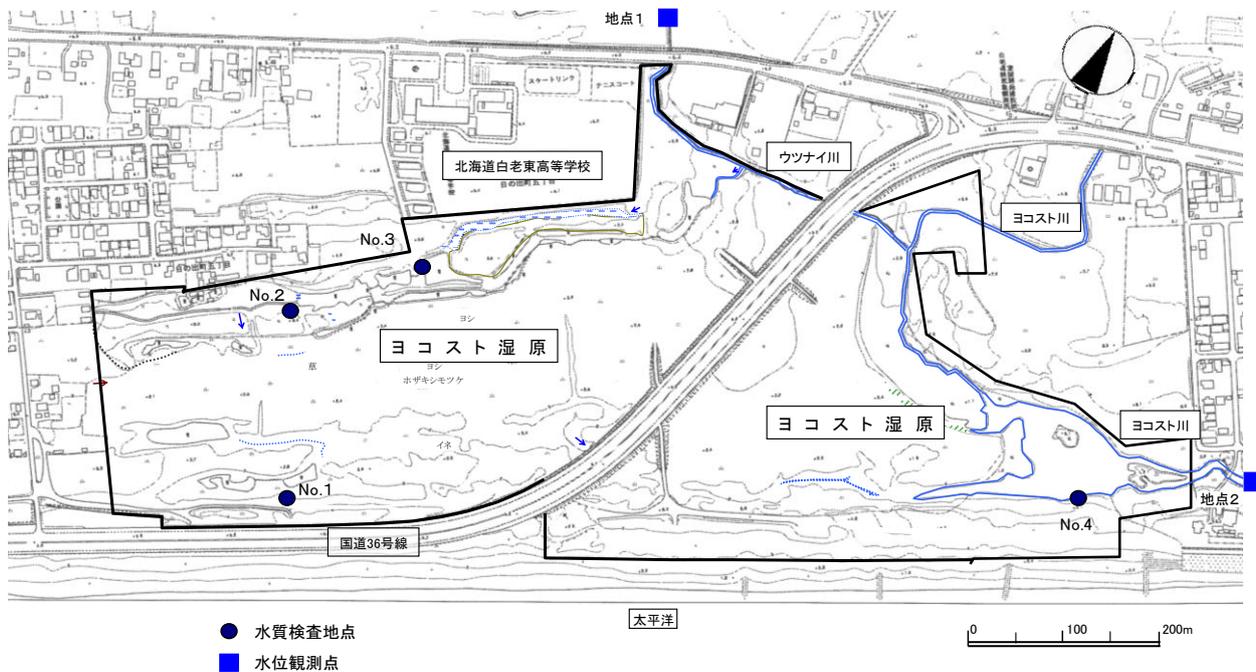


Ⅲ. 水位調査

1. ヨコスト湿原

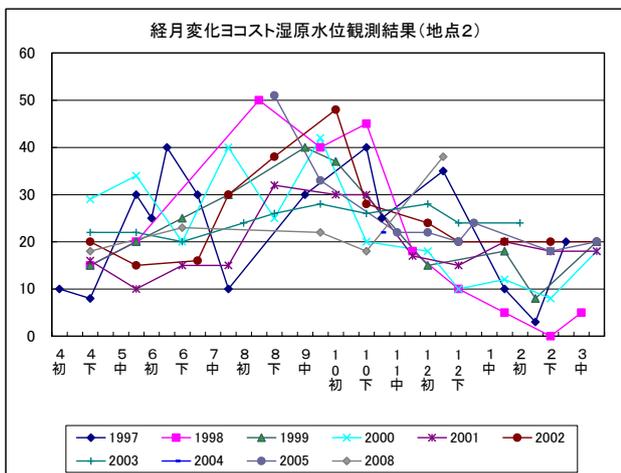
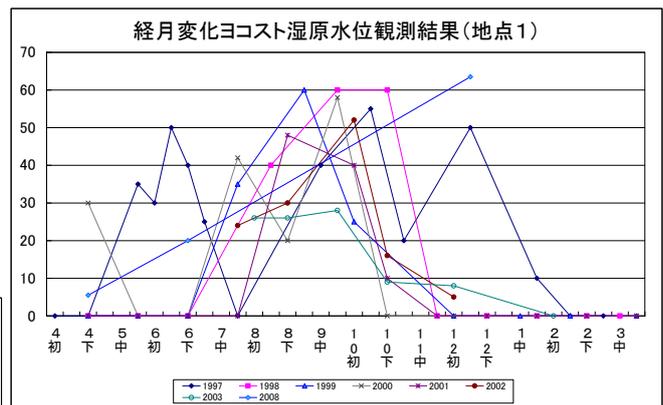
白老町では、1998年から2007年までヨコスト湿原において水位調査を4地点で実施しており、調査地点及び調査結果は表のとおりです。

水質検査地点及び水位観測点



各地点の経月変化をグラフにすると大まかな季節変動の特徴を確認できた。

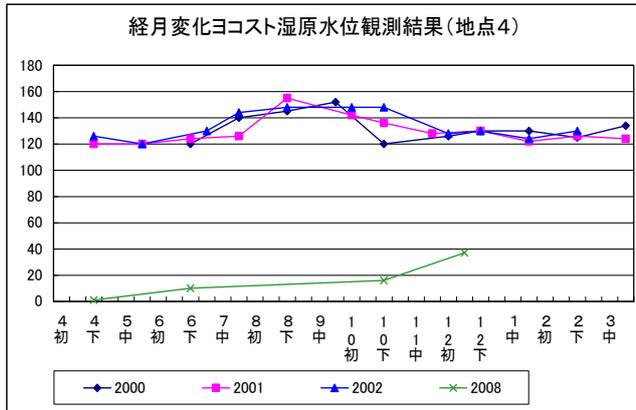
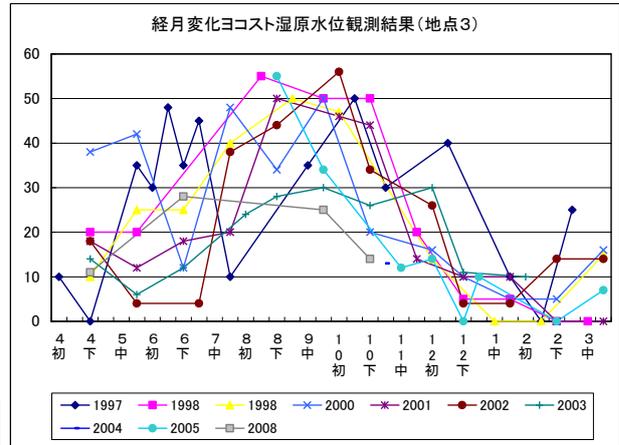
地点1は、ヨコスト湿原の南西に位置しており、夏季に50~60cmと水位が上がる傾向が見られる。また、冬期間は結氷により水位の測定ができなかった。



地点2は、ヨコスト湿原の北西に位置しており、春季から夏期に水位が30~50cmと上がり、冬期間に0~20cmと水位が下がる傾向があります。

地点3は、ヨコスト湿原の白老東高校の南側に位置しており、周辺は林が点在しています。

春季から夏期に水位が 20～55cm と上がり、冬期間に 0～15cm と水位が下がる傾向があります。



地点4は、ヨコスト湿原の南東に位置しており、ヨコスト川流出口に近いところにあります。

他の地点に比べると季節変動が少ないが、夏期に水位が 140～150cm と上がり、冬期間は 120～130cm と水位が下がる傾向があります。

IV. 植物の調査

1. 調査に当たって

調査地は、砂浜や砂丘・海岸草原・川や沼・湿原・広葉樹の林・人の手が加わったと思われる水路と沼や荒地も含まれる。植物にとって多様な生育環境であろうと予想された。調査には多くの方の協力を得られる事になったので、何処にどんな所があり、そこにはどんな植物がどの程度分布しているかについて、可能な限り多くの情報を得て報告する事を目標とした。

2. 調査の方法

調査により確認される植物と場所をつなぐため、調査区域の地形や予想される植生の違に対応した、幾つものエリアを地図上に設定した。地図とコンパスのみで、現在地を知る方法で作成したので、正確さに欠ける事はやむを得なかった。調査の過程でエリアの数が増え、50を超えてしまった。調査はエリア毎に行った。出来るだけ広い範囲を歩きまわり、出現する植物名を調査シートに記入し、それらの植物がどの程度生育していたかを、数字で6段階に評価する方法をとった。

植物調査シート

エリア番号	2010年6月29日	調査者
和名	判定	メモ
アヤステ	6.かなり多 5.多 4.やや多 3.多くはない 2.たまに 1.稀	
イソサワスゲ	6.かなり多 5.多 4.やや多 3.多くはない 2.たまに 1.稀	
ミズキトキリ	6.かなり多 5.多 4.やや多 3.多くはない 2.たまに 1.稀	
ハラオモイカ	6.かなり多 5.多 4.やや多 3.多くはない 2.たまに 1.稀	
サワキオヨウ	6.かなり多 5.多 4.やや多 3.多くはない 2.たまに 1.稀	
ツゼン	6.かなり多 5.多 4.やや多 3.多くはない 2.たまに 1.稀	

感覚的で客観性に欠けるかもしれないが、“ヨコストが好きな多数の目”のちからを発揮していただける方法として辿り着いたものである。

調査チームによる調査は、6月5回・7月4回・8月2回・10月1回行った。時期を変えて1回～6回の調査を行うことができた。当然、季節によって評価が変わるので、前回までのデータと重ねあわせて再評価する事を繰り返した。

調査した50を超えるエリアを、類似したエリアと統合し、植物群落等に区分することを試みて「ヨコスト湿原植生図」(18頁)としてまとめた。調査で集めたデータとまとめる過程で加工したデータを、エクセルファイルとして残した。今後の保全や調査、ワイズユースの検討などの手がかりになれば幸いである。

3. 調査結果

調査区域は多様な環境が複雑に入り組み、多種多様な植物が生育していた。確認された高等植物は、86科・463種(草本382種・木本81種)であった。尚、陸上の多くのエリアを、ハイゴケ(コケ植物)が被っていた。

	科	種
シダ植物	7	22
裸子植物	1	1
双子葉植物（離弁花類）	46	194
双子葉植物（合弁花類）	18	105
単子葉植物	14	143
合 計	86	463

これらには、環境省と北海道が絶滅の恐れがある種として選定した22種の植物が含まれていた。一方、外来種が侵入しており、特にオオアワダチソウとユウゼンギクによる影響が危惧される。

	種 名	科 名	環境省	北海道
1	ノダイオウ	タデ	準絶滅危惧(NT)	
2	エゾノミズタデ	タデ		絶滅危急種(Vu)
3	コキツネノボタン	キンポウゲ	絶滅危惧 II 類(VU)	
4	シコタンキンポウゲ	キンポウゲ	準絶滅危惧(NT)	
5	セナミスミレ(イソスミレ)	スミレ	絶滅危惧 II 類(VU)	希少種(R)
6	ヤマタニタデ(エゾミズタマソウ)	アカバナ	絶滅危惧 II 類(VU)	
7	エゾナミキソウ	シソ	絶滅危惧 II 類(VU)	
8	タヌキモ	タヌキモ	準絶滅危惧(NT)	希少種(R)
9	ベニバナヒョウタンボク	スイカズラ	絶滅危惧 II 類(VU)	
10	バアソブ	キキョウ	絶滅危惧 II 類(VU)	
11	クロユリ	ユリ		希少種 (R)
12	カキツバタ	アヤメ	準絶滅危惧(NT)	
13	クロイヌノヒゲ	ホシクサ	準絶滅危惧(NT)	希少種(R)
14	ヒメミクリ	ミクリ	絶滅危惧 II 類(VU)	希少種(R)
15	ミクリ	ミクリ	準絶滅危惧(NT)	希少種(R)
16	タマミクリ	ミクリ	準絶滅危惧(NT)	
17	エゾミクリ	ミクリ		希少種(R)
18	ヒメガマ	ガマ		希少種(R)
19	エゾサワスゲ	カヤツリグサ	準絶滅危惧(NT)	
20	エゾハリスゲ	カヤツリグサ	絶滅危惧 IB 類(EN)	
21	ハタバスゲ	カヤツリグサ	絶滅危惧 IB 類(EN)	
22	ヤマトキソウ	ラン		絶滅危惧種(En)
	22 種	15 科	17 種	10 種

注：「環境省」「北海道」の欄は環境省と北海道のレッドリストのカテゴリーを示す。

環境省および北海道のレッドリストのカテゴリーについては23頁に参考資料を添付した。

確認された植物を目録にまとめ、25～38頁に載せた。

植物目録に、植物毎の分布状況を“植生図の植物群落の番号”で記した。

4. 植物群落等の概要（観察記）

注：（ ）内の段落番号は「ヨコスト湿原植生図」（18頁）の番号に対応する。

(1) 海浜植物群落

海水をかぶることもある波打ち際から、潮風の影響で砂の移動がある不安定な砂浜に生える植物が主体の群落である。コウボウムギ・ハマニンニク・シロヨモギ・ハマハタザオ・ハマエンドウ・ハマニガナ・ウンラン・セナミスミレ（イソスミレ）・ナミキソウ・ハマヒルガオなどが、春から秋まで次々と咲いて楽しませてくれた。最も波うち際くに生えるハマハコベの幾つかの集団が、今年も姿を見せてくれた。ハマボウフウやオカヒジキも生き延びている。北アメリカ原産といわれる帰化植物のオニハマダイコンは、今のところ分布を拡大している様子は見えない。9月の末になると突然のようにハマエノコロが現れ、ウンランが種をつくりながら、まだ花を咲かせ続けているのが印象的であった。初冬に訪れると、漂着物が砂丘の一部を乗越えそうになり散乱していた。この1年で砂浜が急に大きく浸食を受けたように見える。波が簡単に突堤の陸側まで廻り込むようになったためと考えられ、「養浜」が必要と思われる。



(2) 海岸草原

砂浜とハマナスの群落、沼沢地や湿地に接して、広々とした草原がある。かつては牛馬の放牧地であったという。センダイハギやオオノアザミ、白老では少ないウラジロタデの群生地が、海に浮かぶ島のように見える。シバ・ナミキソウ・ヒメイズイ・キタノコギリソウ・オオヤマフスマ・ヒメシダ・シコタンキンポウゲ・ツリガネニンジン・オミナエシ・カセンソウなど、海岸の草地や砂地を好む植物が生えている。ハマナスの群落やヒオウギアヤメ・ノハナショウブ・エゾミソハギなどの湿地の草花がこれに加わり、樽前山を背景として美しい景観をつくっている。沼沢地の近くにコキツネノボタン・エゾナミキソウが確認できた。



ノハナショウブが咲くアカネムグラ・ヒメシダ群落と海岸草原(右～奥)

(3) ハマナス群落



国道により分割された砂丘にはハマナスが群生している。植物は直接砂の上に生えている。スマレやシロスミレ、ハマエンドウ・オオヤマフスマ・ハマヒルガオ・エゾカワラナデシコ・エゾノカワラマツバ・エゾフウロ・ホソバノキリンソウ・カセンソウ・キタノコギリソウなどが、次々と咲いて美しい。

国道の西側に、沼や湿原に挟まれてハマナスの群落がもう一列ある。少し土を掘ってみると 10～15 cmの黒い腐植土があり、ハマナスなどの植物はこの上に生えている。その下は少なくとも 10 cm以上は軽石であった。砂丘に軽石が積もったのだろう。海岸から離れると、ハマエンドウに代わり、同じマメ科のヒロハクサフジやツルフジバカマが見られた。夏にはエゾノヨロイグサがすっきりと立ち景観を引き立てている。秋にはススキの穂が西からの陽光に輝いた。

(4) アカネムグラ・ヒメシダ群落

国道の海側に、周囲の大半を広々とした海岸草原に囲まれた湿原がある。6月下旬にはヒオウギアヤメが咲き、7月中旬にはノハナショウブが咲いて美しい。同じ頃、アカネムグラが小さな白い花を咲かせ始めるのには、気付く人は少ないかもしれない。タチギボウシ・エゾノレンリソウ・クサレダマ・ミズオトギリ・エゾミソハギなどが見られ、エゾナミキソウがたまに見られた。スゲでは、エゾサワスゲ・ゴウソ・マツバスゲ・ハタベスゲ・アオスゲなどが見られた。秋にはサワギキョウが咲き、ナガボノシロワレモコウが目立った。初夏から秋までヒメシダやコウヤワラビが広い範囲を緑色に被っている。ヒメシダとコウヤワラビはヨコスト湿原のシダ植物の代表だろう。

(5) ナガボノシロワレモコウ・ヒメシダ群落

本格的に植物の調査を始める前の5月中旬に、初めてこの場所に入った。地面がデコボコしていて、低い所には水がたまっており、ひどく歩きにくくて何度も立ち往生した。低い所は水が溜まり何も生えていない部分が多く、高い所はコケと枯れた植物に被われていた。植物の根が土を縛り、枯れた植物とコケが、雪解け水や雨水で土が流れるのを防いでいるようだ。離れて見るとスゲがつくる「谷地坊主」のようにも見えた。



5月のナガボノシロワレモコウ・ヒメシダ群落

主に高い部分に、ナガボノシロワレモコウ・ヒメシダ・ユウゼンギク・コウヤワラビ・ホザキシモツケ・ミズオトギリが多く、サワギキョウ・アブラガヤ・アキノウナギツカミなどが生える。ツボスミレの湿原型というアギスミレも見られ、スゲではゴウソが多くシカクイも見ることができた。所々にヨシが生え、稀にクロミノウグイスカグラが見られた。水が溜まっていた低い部分には、エゾサワスゲ・エゾハリイ・ハリイ・コケオトギリ、僅かにアオコウガイゼキョウも出現した。ごく一部にアオモリミズゴケが生え、高い所のコケは、ごく普通に見られるというハイゴケであることが判った。砂浜と林を除く、多くの部

分をハイゴケが被っていた。この湿原でハイゴケはどのような役割を果たしているのだろうか。この群落は、まとまった雨が降れば洪水状態になるのだが、ユウゼンギクがこんな所にも侵入しているのに驚いた。国道に近い部分のホザキシモツケは小さく枯死したものも見られ、北に向かうにつれて大きくなり数も増えて、ホザキシモツケとヨシの群落へ続いている。

(6) タチギボウシ・ヒメシダ群落

国道の山側のヨシの群落に囲まれた所に、タチギボウシの群生地がある。タチギボウシの間にはヒメシダが多く生えている。タチギボウシやヒメシダの少ないところに、アリノトウグサの小さな群生地が幾つかあった。



6月に、高さが数センチの小さな植物を発見した。何度も足を運び、7月末にようやく花が咲いてアリノトウグサであることが判明した。エゾサワスゲやゴウソ・アオスゲ・マツバスゲ・ヤチスゲも見られ、稀にクロミノウグイスカグラが見られた。地面は主にハイゴケが覆っていた。アイヌ民族も和人も、タチギボウシを山菜として食べたそうだが、エゾシカも好物らしく葉や蕾・実も食べている。この群生地が今後どうなるのかやや心配である。

(7) ホザキシモツケ・ヒメシダ群落

ホザキシモツケが疎らに生え、草本ではヒメシダが最も多くコウヤワラビもある。背の低いヨシが少しとイワノガリヤスが混生する所や、イヌイがやや高密度で生える所もある。アカネムグラもやや多い。ハナニガナ・シロバナニガナ・オトギリソウ・シロネ・ヒメシロネ・クサレダマ・エゾミソハギ・サワギキョウ・サワヒヨドリが咲く。秋にはナガボノシロワレモコウ・アキノウナギツカミ・エゾリンドウ・ススキなどが少しずつ咲く。スゲではゴウソが目についた。

(8) アゼスゲ・アオコウガイゼキショウ群落

通称「石像下の沼」から東へ進むと、一見すると水田の様な所に出る。やや水の深いところは何も生えてないが、大半は植物が生えている。6月には水がある所にはアゼスゲが多く、浅いか無い所にはエゾサワスゲが多く見られた。ミズオトギリが次に多く、サワギキョウ・エゾミソハギなども確認できた。8月初め、水中から茎を上げて小さな白い花を咲かせるヘラオモダカに出会った。翌日の大雨の前に、ヒメミクリを数株発見できたのは幸運だった。コウガイゼキショウの仲間が現れたが、この時点ではどの種であるかは特定できなかった。大雨で水没したため、殆どのコウガイゼキショウの仲間は熟した実を観察できなかった。水没を免れた数少ない個体に熟した実を見ることができたので、アオコウガイゼキショウとタチコウガイゼキショウが多いことが判った。ハリコウガイゼキショウは、水没した実の部分から芽が出て「子持ち」になったので判断できた。9月になって水がひいた所にホシクサ科の植物が少し現れた。ニッポンイヌノヒゲ・イトイヌノヒゲ・クロイヌノヒゲであった。ヨコスト湿原では、この様な所は他には無いので、面積は狭いが貴重な群落だと思う。エゾシカの水飲み場であり、野鳥の水飲み場かエサ場でもあるようだ。秋にはトンボの産卵場所となった。



7月中旬のアゼスゲ・アオコウガイゼキショウ群落(足跡はエゾシカと野鳥)

(9) ホザキシモツケ・ヨシ群落 (比較してヨシが多いところも含めた)

国道の西側で最も大きな面積を占める群落である。7～8月にかけて、ホザキシモツケのピンクの花が、少しずつ場所を変えながらヨコスト湿原を彩る。ホザキシモツケが密生している所や、ヨシが多い所が複雑に入組んでいる。密生するホザキシモツケは背丈より高く“壁”のような状態で、その中にはひょろりとしたアカネムグラやヒメシダ・コウヤワラビが僅かに生えるだけである。調査は主にエゾシカの道歩いて行いう事になった。ホザキシモツケやヨシが密生していない所にはアカネムグラなどが見られる。群落の奥深くに、ノリウツギ・エゾノコリンゴ・カンボク・背の低いハンノキやヤチダモなどの樹木が、海岸とほぼ平行して点々と列島状に生えている。周囲よりわずかに高く、乾燥

化が進んでいる。オオアワダチソウが侵入して幾つかの群生地をつくっている。



(10) クサヨシ・イワノガリヤス群落

ヨシやホザキシモツケの群落に接して、クサヨシとイワノガリヤスが多く生えるエリアがある。群落の境界付近にはヨシやホザキシモツケもある。クサヨシが密生する部分には他の植物は生えず、他の部分にはアカネムグラやヒメシダやコウヤワラビが混生している。オオアワダチソウが密生している所もある。7月になると、背丈ほど大きくなったクサヨシが、風により倒伏して足に絡みつくので、エゾシカも避けて行動しているようだ。

(11) ヨシ群落

ヨコスト湿原には大きく分けると二つのヨシ群落がある。一つは、国道の西側の通称「石像下の沼」とつながり、国道の下につくられた水路に向かって集まるかのような形をした群落である。



ヨシ群落と国道の下の水路と水の動き

かつてはウツナイ川が流れていたと推測される。常に水がある所や低い所は概ねヨシが密生している。ヨシが少しまばらになると、アブラガヤやフトイがたまにあり、ウキヤガラが稀に生える。周辺部にはオオカサスゲ・オニナルコスゲ・ツルスゲ・アゼスゲなどのスゲ属が主に生えている所もあり、稀にエゾノミズタデが見られた。国道の下に設けられた水路の上流側では僅かに水が動いているのを確認したが、下流側はクサヨシやイワノガリヤスの群落となっており水面は見えない。水は国道の下で地下に潜っているのではないかと推測される。もう一つは、ウツナイ川とヨコスト川が合流した所にある大きなヨシの群落である。さらに、川の両側に続いているのが見えるが、近づくことが出来ない。冬になりマコモが枯れて倒れたので、川の中央付近にはマコモが生え岸寄りにはヨシが生えていることが判った。倒れたマコモの上にオオハクチョウの姿が見えた。

(12) ヨコスト川沼沢湿原植物群落

ウツナイ川とヨコスト川が国道の下流で合流し、ヨシとマコモとミクリの群落を形成して海岸方向へ流れている。西岸のヨシとスゲの間には、カキツバタとコウホネの小さな群生地があった。クロバナロウゲも見られた。



やや右奥にミクリの群生地がある

一方、海岸の砂丘に沿って細長い湿原がヨコスト川へつながっている。ヨシやマコモが目立つ。昭和 37 年の航空写真を見ると、当時はウツナイ川が流れていたと推測され、旧ウツナイ川沼沢湿原と呼ぶべきかもしれない。開放水面の岸寄りには、浮葉植物であるコウホネとエゾノヒツジグサが、かたまって生えているのが数箇所見えた。ヨシやマコモの間でも確認できた。水中には沈水植物であるフサモとヤナギモが見えたが、分布状況は調べることができなかった。次に水深の深い所から順に、ミクリ・マコモ・ヨシなどの抽水植物、スゲ・クサヨシが帯状に群生している。それらの中にショウブ・トウヌマゼリ・ドクゼ

リ・セリ・アブラガヤの仲間・フトイ・オオヌマハリイ・エゾノミズタデ・クロバナロウゲ・ミズスギナなどが見られた。周辺部にはミゾソバ・アキノウナギツカミ・ヤナギタデ・アカネムグラ・エゾミソハギ・ヒオウギアヤメ・コキツネノボタン・ヤナギトラノなどが見られた。夏の終わり頃、湿原の縁に白く光るヤマアワ（山粟）の穂の列が現れ、意外に湿ったところも好む植物であることが判り印象に残った。

(13) 石像下の沼

通称「石像下の沼」は、南と北の二つの沼からなるが、夏から秋の乾燥期以外はつながっていることが判った。沼はまとまった雨が降ると、数日後に最も水位が高くなった。水は流れていないので、川とつながる植物群落とはやや異なるようであり、二つの沼にも違いがあることが判った。

A. 南の沼

水深が比較的深いと思われるところにはマコモが生えている。やや浅い所にはフトイ・オオヌマハリイ・タマミクリなどの抽水植物とヒメハリイが少し見られるが、ほかはヨシである。水際やその付近にはエゾノミズタデ（陸生型）・アゼスゲ・アカネムグラ・エゾミソハギ・シロネなどが見られた。水中にはタヌキモが漂っていたが、7月の末には干上がった泥の上に黄色い花を幾つか見ることができた。食虫植物であるという。どんな虫が捕まるのだろう。これまで水面が空いていた所に、7月に沈水性のフサモが茎を立ち上げて、小さな花を咲かせ水面をほぼ被った。8月には同じ水面にヒシの葉や花が浮かんだ。僅かに時期を変えて、同じ水面を絶妙にシェアしているように見える。ヒルムシロ・エゾノヒツジグサも少し見られた。沼が最も美しいのはこの季節である。



7月のフサモ（左）と8月のヒシ（右）

B. 北の沼

北の沼と比較すると、マコモが無くヒメガマの群生地がある。2004年にはガマが群生していたはずの同じ場所であり、分布をやや拡大している。穂を出したものは少なかったが、全てヒメガマであった。沼に入って多くの葉を観察したが、すべてヒメガマと思われた。穂が出る時期にもう一度確かめるしかないだろう。ヨシの外側にはクサヨシ・ツルスゲが加わる。タマミクリ

に代わって生えているミクリは、数年前まではまとまって群生していたが、徐々に少なくなっているようだ。フサモ・タヌキモ・エゾノヒツジグサ・ヒシは少ない。ヒルムシロ・オヒルムシロ・ヤナギモが少しある。浅い所には、イ・オオヌマハリイ・サンカクイ・ヒメハリイ・ヘラオモダカが確認できたが、シズイは確認できなかった。水際にはエゾサワスゲ・コキツネノボタンを確認した。しかし、水が少なくなった沼の水際に、夏の終わり以降に出現するハリイやホシクサ科の植物、僅かにあったサワトウガラシなどは今年も確認できなかった。最近、白老特有の梅雨のような気候が少なくなり、雨の降り方が変わったように感じるが気のせいだろうか。今年も8月に大雨が降り、9月になっても沼は満水状態であった。暑さのためか大量の藻が発生して、水際などに生える植物や背の低い植物に覆いかぶさり、影響を与えているように見えた。



以前は8月に見られた光景が6~7月に見られた。

中央の濃い緑がヒメガマの群生地

(14) ズミ・エゾノコリンゴ群落

湿原や草原に、小低木が列島のように連なって生えている。



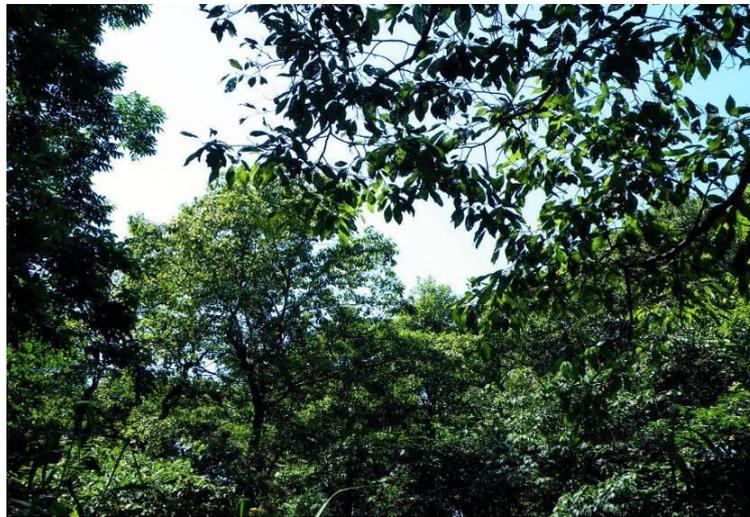
白い花が列島のように続く。以前は砂丘だったのだろうか。

ズミとエゾノコリンゴが優占し、カンボク・クマヤナギ・ミヤマザクラなども多い。ワタゲカマツカや山地に生えるキタコブシもある。種が野鳥によって運ばれたのだろうか。小低木の下はヒメシダやコウヤワラビが多いが、土地が周囲よりも少し高く、オオヨモギやオオチゴユリ・キジムシロなどが見られる。

(15) ハンノキ林

ハンノキは、ほかの樹木があまり育たない過湿地で林を形成する代表的な樹木だといわれる。国道の西側の湿原の東の端に、夏になると空の大半をハンノキの葉が被う林がある。次に多いのはミヤマザクラである。

この群落で初めて見ることができたエゾノウワミズザクラは、日本では北海道だけに自生するといわれる。エゾノウワミズザクラとミヤマザクラは5月の末から6月にかけて咲くサクラの仲間である。



水路の上の空も覆うハンノキの葉

ウツナイ川の川岸や沼のそばにはオノエヤナギが、適湿地を選んでヤマグワが、林縁にはノリウツギが多く生えている。湿原との境にはホザキシモツケが生えている。ツルウメモドキやサルナシ(コクワ)・マタタビ・ヤマブドウなどの蔓(つる)植物を「森のギャング」と呼ぶことがある。樹木を絞めつけたり、覆いかぶさり倒してしまったりするからだ。ここではクマヤナギが「森のギャング」の主演となっている。クマヤナギは北海道では胆振地方に多く生育し、実は2年がかりで赤から黒く成熟する。花と実が同時に見られる変わり者だ。樹木や林床の植物の種類も多く、湿原からの遷移が進んだ部分なのだろう。林床の主な植物はオオクマザサやヒメシダ・コウヤワラビ・ニッコウシダ・オシダ・クサソテツなどのシダ植物、マイヅルソイウ・フッキソウなどである。エナシヒゴクサやアオスゲなどのスゲが散在する。雨が降ると水が溜まりいつも濡れている所には、カサスゲがまとまって生えている。ハンノキ林の北の端を流れるウツナイ川には、沈水型のエゾミクリと水中に生育する沈水植物センニンモが見られた。流れに沿って細長い幾つもの群生地をつくり速い流れに揺らめいていた。

国道を挟んだ海側の部分は、ハンノキ林の端に当たる。山地の日当りを好む

ミヤマザクラや湿原にも生えるノリウツギ、ヤマグワ・ワタゲカマツカ・クマヤナギなどがハンノキよりも多くなる。樹木が徐々に小さく、少なくなって海岸草原へとつながっていく。草原から林への遷移の最前線なのだろう。

(16) ノリウツギ群落

白老東高校と住宅地の裏には水路がある。掘った土砂を置いたと思われる所が、帯状に周囲より盛り上がっている。生える植物にも違いがある。日当りの良い山地や原野・湿地を好むというノリウツギが多い。背の低いワタゲカマツカやハンノキなどが生えている。木の下にはオオヨモギやシダ類も生えているがオオアワダチソウがかなり侵入している。ノリウツギは、湿原のところどころと、ハンノキやミズナラの林の縁にも生えている。夏の白老では、車窓からでもあちこちで楽しむ事が出来たノリウツギ（サビタ）の白い飾り花が、徐々に少なくなっている。

(17) ワタゲカマツカ・エゾクロウメモドキ群落

通称「石像下の沼」と周囲の湿原よりも、一段高い東西に細長い林である。ワタゲカマツカは、一株からラップ状に何本も萌芽しており樹高は 3m に満たないようだ。エゾノコリンゴ・エゾクロウメモドキ・ケヤマウコギ・ヒロハノヘビノボラズなどの棘がある木が多く、クマヤナギのツルも絡んでジャングルのような。林床及び林縁にはカワカミスゲ・シロネ・ヒメシロネ・マイズルソウ・コウヤワラビなどが見られる。林の南の縁に、ツルヨシとススキが帯状に細長く群生し、その所々にバアソブが見られた。

(18) ミズナラ・オオクマザサ群落

住宅地と白老東高校の裏にある、東西に細長い広葉樹の林である。ミズナラが最も多く、アズキナシ・ミヤマザクラ・ワタゲカマツカ・イタヤカエデ・ヤマモミジ・ヤマグワ・アオダモが目につく。ミズナラ・アズキナシは株立ちしているものが多いようだ。秋早くから紅葉したツタウルシが目立ち、水路の縁にはハンノキが生えている。南の縁には細長くカシワが混生している。林縁にエゾニュウがまとまって生えている所があった。林床は主にオオクマザサに被われている所が最も多いが、オシダやニッコウシダ・ヤマドリゼンマイなどのシダが優占するところもあり、地面が微妙に起伏していることがわかる。林の中を歩く時は、いつもツルニンジンの匂いがする。注意していても気付かずに踏み付けてしまうことが度々であった。

(19) オオクマザサ群落

通称「石像下の沼」の西側に、密生する笹に被われた所がある。良く見るとハマナス・オオヨモギ・エゾノヨロイグサ・アキタブキ・ススキなどが少しある。オオクマザサは年々その生育範囲を拡大している。周囲の乾燥化が進んでいるからだろうか。オオクマザサ群落の東の端にオオイタドリが群生している。

(20) 排水路・人工の沼

住宅地と白老東高校の裏に、温泉の排水を流すためと思われる水路と、人の手が加わったと思われる沼がある。水路でつなぎ、掘り下げたり、広げたりしたようだ。何かの目的で新たに掘ったものもあるようだ。ヨシやクサヨシ、ツルスゲなどのスゲが生えている所が多く、オオカサスゲの小群生地が幾つかある。水面が大きく空いているところも多い。沼の一つには、タヌキモ・コウキクサ・エゾノヒツジグサが見られた。普通は孤立していて水の流れが無いからだろう。主にスゲ類が生える浅い沼には、タマミクリが畳2枚程の広さで生えている。やや大きな沼の端にミクリが群生している。

この付近の水の動きは（観察できた範囲で）次のようであった。

西からは温泉の排水が常に流入している。一部は水路や沼を東へ向かってながれ、一部はミズナラ・オオクマザサ群落を分断する水路を湿原に向かって流れている。どちらもすべて地下に浸透しているようだ。今では重要な水の供給源となっていると考えられる。水路は東の端でウツナイ川と繋がっている。しかし、水位が普通の際はあちこちで分断され、水はどちらにも流れていないようだ。ウツナイ川から湿原へ流入するのは、雪解けや大雨により川の水位が上がる時のみである。湿原への水の供給源は他には見当たらなかった。温泉の排水と、雨による不安定な供給だけである。

5. 注目したい群落等

次の群落を注目したい。

ヨコスト川沼沢湿原植物群落

石像下の沼・アゼスゲ・コウガイゼキショウ群落

ナガボノシロワレモコウ・ヒメシダ群落

かつてのヨコスト湿原は、蛇行するウツナイ川とヨコスト川から供給される豊富な水による広々とした沼沢湿原が大部分を占めていたと推測される。ヨコスト川沼沢湿原植物群落と石像下の沼は、当時の植生が残っていると推測されるエリアだろう。希少種が多く水辺の景観も美しい。アゼスゲ・アオコウガイゼキショウ群落とナガボノシロワレモコウ・ヒメシダ群落は、湿原の変化を観察するエリアとして注目したい。しかし、植物はそれぞれ影響を及ぼしつつも、微妙な環境の違いを巧みにすみ分けながら生育していると考えられる。重要な要素である水の動き一つにしても、目に見える地上だけでも複雑であり、個々の群落を切り離して考えるべきではないだろう。

6. 植物がつくる景観

国道の海側では、複雑に入り組んだ幾つかの植物群落が、季節の移ろいと共に様々な草花を次々と咲かせている。樽前山や海・川などの背景と一体となって、独特の美しい景観を作り出している。原生花園ともいえるだろう。国道の西ではマコモやヨシなど湿原の植物と、砂丘のススキやオギが荒涼とした冬枯れの景観をつくり出す。一般的に、湿原に見える人工物は邪魔な存在のようではあるが、

遠くに見える住宅地は立体感を生み出し、市街地に近いヨコスト湿原ならではの景観を演出していると感じたがどうだろうか。この報告書に写真の一部を載せた。ぜひ訪れていただければと思う。

7. ヨコスト湿原の植物とエゾシカ

ヨコスト湿原には何頭かのエゾシカが生息しているようだ。

壁のように立ちはだかるホザキシモツケの密生地はシカの道を歩かせてもらった。ヨコスト湿原で彼らが何を食べているか、植物の調査をしながらメモした。

クロユリ（蕾）・ツリガネニンジン（花が咲く前の茎～先）

タチギボウシ（若い葉・蕾・実）・ヘラオモダカ（蕾をつけた茎・葉）

エゾミソハギ（花が咲く前の茎～先）・シロネ（花が咲く前の茎～先）

キンミズヒキ（花が咲く前の茎～先）・ノリウツギ（若い枝先）

ハエドクソウ（花が咲く前の茎～先）・ヨシ（葉の先）

アキノキリンソウ（花が咲く前の茎～先）・オオノアザミ（花が咲く前の茎～先）
ササ（冬季一葉）

タチギボウシとツリガネニンジンが好物らしい。タチギボウシは“ウルイ”・ツリガネニンジンには“トトキ”の別名があり、山菜として人間も食べるそうだ。タチギボウシ・ヒメシダ群落とその近くには、シカが寝そべった痕が幾つも見られた。食料が豊富で見通しがきき、近くに水飲み場もあり絶好の場所なのだろう。秋が近づくと蹄で地面を引っ掻いた痕（ぬた場と言われるものらしい）もみられた。食痕の多くは国道の西側に見られたが海側でも見られた。冬の住宅地の裏の林では、温泉の排水を飲みササの葉を食べ、日当たりの良い林の縁で休息しているようすが、雪上の足跡、大量の糞や食痕などから推測された。

8. 感想と考察

比較的コンパクトな空間に、砂浜・砂丘・海岸草原・沼沢地、湿原とその遷移の過程と思われる湿った草地や林など、多様な環境があり多種多様な植物が生育していた。又、幾つかの植物が、環境の微小な差を利用して絶妙にすみ分けている様子が観察され大変興味深かった。一方、以前に見られた植物の幾つかは、今回確認することができなかった。これらは特に不安定な環境に生育していた植物である。自然の植物を保護するには、生育環境の保全が不可欠であることを実感した。湿原は構造的に非常に脆弱で不安定であり、いったんバランスが崩れるとその回復は容易でないという。

ヨコスト湿原には、22種の希少種を含む多種多様な植物が生育しているが、一度失われると完全に元に戻すことは出来ないだろう。しかし、わずかな面積でも適した環境があれば、たくましく生き延びていく姿を垣間見ることができた。

この湿原は、一部の人々以外にはあまり知られていないと考えられる。水の供給が途絶えて大きな影響を受け、今も受け続けている事や、国道のバイパスで分断されてしまった事が一因かもしれない。

執筆：坂本清司

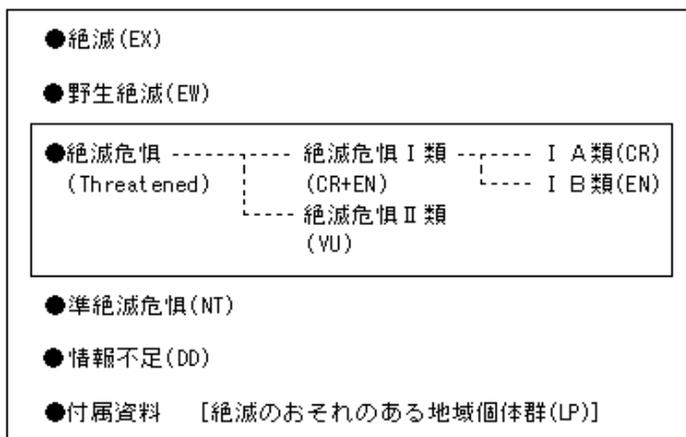
参考資料

北海道レッドデータブックカテゴリー（RDBランク）2001年 北海道のホームページより

高 危険度 低	Ex	絶滅種(Ex)	すでに絶滅したと考えられる種または亜種
	Ew	野生絶滅種(Ew)	本道の自然界ではすでに絶滅したと考えられているが、飼育等の状態で生存が確認されている種または亜種
	Cr	絶滅危機種(Cr)	絶滅の危機に直面している種または亜種
	En	絶滅危惧種(En)	絶滅の危機に瀕している種または亜種
	Vu	絶滅危急種(Vu)	絶滅の危機が増大している種または亜種
	R	希少種(R)	存続基盤が脆弱な種または亜種(現在のところ、上位ランクには該当しないが、生息・生育条件の変化によって容易に上位ランクに移行する要素を有するもの)
	LP	地域個体群(LP)	保護に留意すべき地域個体群
	N	留意種(N)	保護に留意すべき種または亜種(本道においては個体群、生息生育ともに安定しており特に絶滅のおそれはない)

環境省レッドリストカテゴリー（2007年） 環境省のホームページより

● 絶滅(EX)	わが国では絶滅したと考えられる種
● 野生絶滅(EW)	飼育や栽培下でのみ存続している種
● 絶滅危機I類(CR+EN)	絶滅の危機に瀕している種
○ 絶滅危惧IA類(CR)	ごく近い将来の絶滅の危険性が極めて高い種
○ 絶滅危惧IB類(EN)	絶滅危惧IA類ほどではないが、絶滅の危険が高い種
● 絶滅危惧II類(VU)	絶滅の危険が高まっているもの
● 準絶滅危惧(NT)	現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種
● 情報不足(DD)	情報不足で評価できないもの
● 地域個体群(LP)	地域的に孤立しており、地域レベルでの絶滅の恐れが高い種

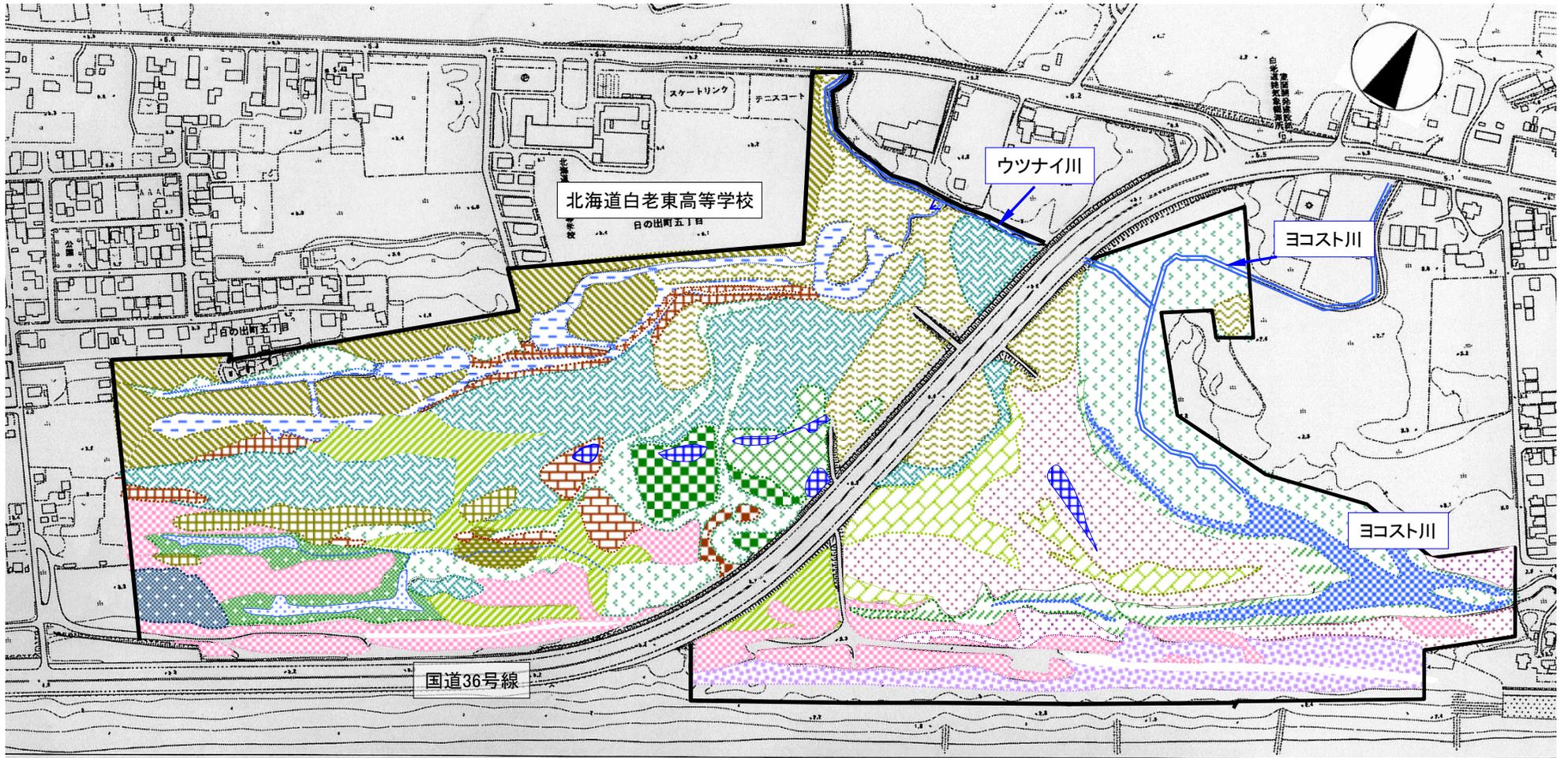


北海道ブルーリスト 2010年 カテゴリー

A1	緊急に防除対策が必要な外来種
A2	本道の生態系等へ大きな影響を及ぼしており、防除対策の必要性について検討する外来種
A3	本道に定着しており、生態系等への影響が報告または懸念されている外来種
B	本道に定着しているが、上記以外のもの

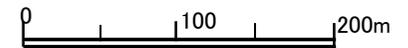
※国外外来種及び国内外来種を含む。

注：カテゴリー（ランク）は、すべての動植物に対応する。



凡例

太平洋



1 海浜植物群落		8 アゼスゲ・アオコウガイゼキショウ群落		15 ハンギ林	
2 海岸草原		9 ホサキシモツカ・ヨシ群落		16 ノリウギ群落	
3 ハマナス群落		10 クサヨシ・イワノガリヤス群落		17 ワタゲカマンカ・エゾクロウメドキ群落	
4 アカネムグラ・ヒメシダ群落		11 ヨシ群落		18 ミズナラ・オオクマササ群落	
5 ナカボシロワレモコウ・ヒメシダ群落		12 ヨコスト川沼沢湿原植物群落		19 オオクマササ群落	
6 タチキボウシ・ヒメシダ群落		13 石像の下の沼		20 排水路・人工の沼	
7 ホサキシモツカ・ヒメシダ群落		14 ズミ・エゾノコリンゴ群落			

ヨコスト湿原植生図

植物目録 (1/14)

No.	名 分 類			科 名	種 名	環R	北R	北B	開花時期
1	シダ植物			トクサ科	イヌスギナ				夏緑性
2					オクエゾスギナ				夏緑性
3					スギナ				夏緑性
4					ミズスギナ				夏緑性
5				ハナヤスリ科	エゾフユノハナワラビ				常緑性
6				ゼンマイ科	ゼンマイ				夏緑性
7					ヤマドリゼンマイ				夏緑性
8				オシダ科	オシダ				夏緑性
9					シラネワラビ				夏緑性
10					タニヘゴ				夏緑性
11				ヒメシダ科	ニッコウシダ				夏緑性
12					ヒメシダ				夏緑性
13				メシダ科	ミヤマワラビ				夏緑性
14					イヌガンソク				夏緑性
15					クサソテツ				夏緑性
16					コウヤワラビ				夏緑性
17					ホソバシケシダ				夏緑性
18					ミヤマシケシダ				夏緑性
19					エゾメシダ				夏緑性
20					ヘビノネコザ				夏緑性
21				ミヤマメシダ				夏緑性	
22				ウラボシ科	ホテイシダ				夏緑性
23	裸子植物			イチイ科	イチイ				4-5
24	被子植物	双子葉植物	離弁花類	クルミ科	オニグルミ				6-7
25				ヤナギ科	ドロノキ(ドロヤナギ)				5
26				イヌコリヤナギ					5
27				エゾノキヌヤナギ					4-5
28				バッコヤナギ					5
29				オノエヤナギ					5
30				カバノキ科	ウダイカンバ				5
31				シラカンバ					5
32				サワシバ					6
33				ケヤマハンノキ					4
34				ハンノキ					4-5

植物目録 (2/14)

No.	名 分 類			科 名	種 名	環R	北R	北B	開花時期		
35	被子植物	双子葉植物	離弁花類	カバノキ科	ミヤマハンノキ				5-6		
36				ブナ科	クリ				6		
37					カシワ				5-6		
38					ミズナラ				5		
39					ニレ科	ハルニレ				4-5	
40					クワ科	カラハナソウ				8-9	
41						ヤマグワ				6-7	
42					イラクサ科	クサコアカソ				8	
43						アオミズ				8-9	
44						ミズ				9-10	
45					タデ科	ハナタデ				8-9	
46						エゾノギシギシ				A3	7
47						ナガバギシギシ				A3	7-8
48						ノダイオウ		NT			7-9
49						ヒメスイバ				A3	6-7
50						アキノウナギツカミ					8-9
51						イシミカワ					7-9
52						イヌタデ					8-9
53						ウラジロタデ					7-8
54						エゾノミズタデ				Vu	9
55						オオイタドリ					7-8
56						タニソバ					8-9
57						ハイミチヤナギ				A3	7-9
58						ミズヒキ					7-8
59						ミゾソバ					8-9
60						ヤナギタデ(マタデ)					8-9
61						ヤノネグサ					8-9
62						ナデシコ科	オオヤマフスマ				6-7
63							ツメクサ				5-9
64							ハマツメクサ				5-8
65							エゾカワラナデシコ				6-9
66							ナガバツメクサ				6-8
67							ミヤマハコベ				5-6
68							ハマハコベ				6-8
69							マツヨイセンノウ			A3	7-8

植物目録 (3/14)

No.	名 分 類			科 名	種 名	環R	北R	北B	開花時期	
70	被子植物	双子葉植物	離弁花類	ナデシコ科	ムシトリナデシコ			A3	7-8	
71					オランダミミナグサ			B	5-7	
72					ミミナグサ					5-7
73				アカザ科	アカザ					8-9
74					コアカザ			B	6-7	
75					シロザ					8-9
76					オカヒジキ					7-8
77				モクレン科	キタコブシ					5
78					ホオノキ					6
79				マツブサ科	チョウセンゴミシ					6-7
80				カツラ科	カツラ					5
81				キンポウゲ科	アキカラマツ					7-9
82					カラマツソウ					6-7
83					キツネノボタン					7-8
84					コキツネノボタン	VU				7-8
85					シコタンキンポウゲ	NT				6-7
86					サラシナショウマ					8-9
87					フクジュソウ					4-5
88				メギ科	ヒロハノヘビノボラズ					5-6
89					メギ				B	5
90				スイレン科	コウホネ					6-8
91					エゾノヒツジグサ					7-9
92				センリョウ科	フタリシズカ					5-6
93				マタタビ科	サルナシ (コクワ)					6-7
94				オトギリソウ科	オトギリソウ					7-8
95					コケオトギリ					7-8
96					トモエソウ					7-8
97					ミズオトギリ					8-9
98	モウセンゴケ科	モウセンゴケ					7-8			
99	ケシ科	ムラサキケマン					5-6			
100	アブラナ科	オニハマダイコン					A3	6-8		
101		オオバタネツケバナ						5-6		
102		コンロンソウ						5-6		
103		ハマハタザオ						5-6		
104		ハルザキヤマガラシ					A3	5-6		

植物目録 (4/14)

No.	名 分 類			科 名	種 名	環R	北R	北B	開花時期	
105	被子植物	双子葉植物	離弁花類	アブラナ科	ヤマガラシ				6-7	
106					ヤマハタザオ				6-7	
107				ベンケイソウ科	ホソバノキリンソウ				7-8	
108					ミツバベンケイソウ				8-9	
109				ユキノシタ科	ノリウツギ				7-8	
110					イワガラミ				6-7	
111				バラ科	キンミズヒキ				7-9	
112					ヒメキンミズヒキ				8-9	
113					ヤマブキショウマ				6-8	
114					トリアシショウマ				7-8	
115					オオダイコンソウ				6-7	
116					ダイコンソウ				7-9	
117					エゾノコリンゴ				5-6	
118					ズミ				5-6	
119					オニシモツケ				7-8	
120					ミツバツチグリ				5-6	
121					キジムシロ				5-7	
122					ミツモトソウ				7-9	
123					エゾノミツモトソウ				A3	7-9
124					ヒロハノカワラサイコ					6-9
125					クロバナロウゲ					6-7
126					ワタゲカマツカ					5
127					エゾノウワミズザクラ					5下-6
128					エゾヤマザクラ					5
129					カスミザクラ					5下
130					ミヤマザクラ					5下-6
131					ノイバラ					7-8
132					ハマナス					6-8
133					エゾイチゴ					6-7
134					クマイチゴ					6-7
135					ナワシロイチゴ					6-7
136					ナガボノシロワレモコウ					8-9
137					アズキナシ					6
138					ナナカマド					6
139					ホザキシモツケ					7-8

植物目録 (5/14)

No.	名 分 類			科 名	種 名	環R	北R	北B	開花時期	
140	被子植物	双子葉植物	離弁花類	マメ科	ヤブマメ				8-9	
141					ヤブハギ				7-9	
142					ヤハズソウ				8-9	
143					ハマエンドウ				5-7	
144					エゾノレンリソウ				6-9	
145					エゾヤマハギ				8-9	
146					センダイハギ				6-7	
147					ムラサキツメクサ				A2	5-10
148					シロツメクサ				A2	5-8
149					クサフジ					7-8
150					ツルフジバカマ					8-9
151					ヒロハクサフジ					7-8
152					ナンテンハギ					6-9
153					シャグマハギ				A3	7-9
154				カタバミ科	エゾタチカタバミ				7-8	
155				フウロソウ科	エゾフウロ				7-8	
156					ゲンノショウコ				7-9	
157				ミカン科	キハダ				6-7	
158					サンショウ				5-6	
159				ニガキ科	ニガキ				5-6	
160				ウルシ科	ツタウルシ				5-6	
161					ヤマウルシ				5-6	
162				カエデ科	イタヤカエデ (エゾイタヤ)				5	
163					ハウチワカエデ				5	
164					ヤマモミジ				5	
165				ツリフネソウ科	ツリフネソウ				7-9	
166					キツリフネ				7-9	
167				ニシキギ科	ツルウメモドキ				5-6	
168	ニシキギ					5-6				
169	ツリバナ					5-6				
170	マユミ					5-6				
171	ツゲ科	フッキソウ				5				
172	クロウメモドキ科	エゾクロウメモドキ				5-6				
173		クマヤナギ				8-9				
174	ブドウ科	ノブドウ				7-8				

植物目録 (6/14)

No.	名 分 類			科 名	種 名	環R	北R	北B	開花時期		
175	被子植物	双子葉植物	離弁花類	ブドウ科	ヤマブドウ				6		
176					ツタ				7		
177				グミ科	ナツグミ					5-6	
178				スマイレ科	スマイレ					5-6	
179					シロバナスマイレ					5-6	
180					サクラスマイレ					5-6	
181					フイリミヤマスミレ					5-6	
182					ヒカゲスマイレ					5-6	
183					ツボスマイレ					5-6	
184					アギスマイレ					5-6	
185					セナミスミレ(イソスマイレ)	VU	R			5-6	
186					タチツボスマイレ					5-6	
187					ミソハギ科	エゾミソハギ					8
188					ヒシ科	ヒシ					7-8
189				アカバナ科	ヤマタニタデ	VU				8-9	
190					イワアカバナ					7-9	
191					アカバナ					7-9	
192					メマツヨイグサ				A3	7-9	
193				アリノトウグサ科	アリノトウグサ					7-8	
194					フサモ					6-7	
195				ミズキ科	ミズキ					6-7	
196				ウコギ科	ケヤマウコギ					8-9	
197					ウド					7下-8	
198					タラノキ					8	
199					ハリギリ					7-8	
200				セリ科	イワミツバ					A2	6-7
201					エゾノヨロイグサ					7-8	
202					オオバセンキュウ					7-8	
203					エゾニュー					7-8	
204	コガネサイコ						7-8				
205	ドクセリ						7-8				
206	ミヤマセンキュウ						8-9				
207	ハマボウフウ						6-8				
208	セントウソウ						4-6				
209	オオチドメ						6-8				

植物目録 (7/14)

No.	名 分 類		科 名	種 名	環R	北R	北B	開花時期		
210	被子植物	双子葉植物	離弁花類	セリ科	マルバトウキ			7-8		
211					セリ			7下-9		
212					オオカサモチ			6-8		
213					ウマノミツバ			7-8		
214					イブキボウフウ			7下-9		
215					タニミツバ			7-8		
216					トウヌマゼリ			8-9		
217					合弁花類	ツツジ科	イソツツジ			
218				ハナヒリノキ						7-8
219				レンゲツツジ						6
220				サクラソウ科		ヤナギトラノオ				6-7
221						クサレダマ				7下-9
222				モクセイ科		アオダモ				6
223						ヤチダモ				5
224						イボタノキ				7
225						ミヤマイボタ				6-7
226		ハシドイ						7		
227		リンドウ科	エゾリンドウ						9-10	
228			ハナイカリ						8-9	
229		ガガイモ科	ガガイモ						7-8	
230			イケマ						7-8	
231		アカネ科	ホソバノヨツバムグラ						6-8	
232			キクムグラ						6-7	
233			クルマムグラ					5-7		
234			エゾノカワラマツバ					6-8		
235			アカネムグラ					7-8		
236		ヒルガオ科	ヒルガオ					6-9		
237			ハマヒルガオ					5-8		
238			ネナシカズラ					8-9		
239		ムラサキ科	ヒレハリソウ				A3	6-8		
240			ノハラムラサキ				A3	5-7		
241		クマツヅラ科	ムラサキシキブ					8-9		
242	シソ科	クルマバナ					7-9			
243		イヌトウバナ					8-9			
244		ナギナタコウジュ					8-10			

植物目録 (8/14)

No.	名 分 類			科 名	種 名	環R	北R	北B	開花時期	
245	被子植物	双子葉植物	合弁花類	シソ科	カキドウシ				5-6	
246					シロネ				8-9	
247					エゾシロネ				7下-9	
248					ヒメシロネ				8-9	
249					コシロネ				8-9	
250					ハッカ				7-9	
251					ウツボグサ				6-8	
252					ヤマハッカ				8-9	
253					ヒメナミキ				6下-9	
254					ナミキソウ				7-8	
255					エゾナミキソウ			VU	7-8	
256					イヌゴマ				7-9	
257					ツルニガクサ				7-9	
258					ゴマノハグサ科	ウンラン				8-9
259				エゾコゴメグサ					7中-9中	
260				ビロードモウズイカ				A3	7-9	
261				タヌキモ科	タヌキモ		NT	R		7-8
262				ハエドクソウ科	ハエドクソウ					7-8
263				オオバコ科	オオバコ					6-9
264					エゾオオバコ					5-8
265					ヘラオオバコ				A2	5-8
266				スイカズラ科	クロミノウグイスカグラ					5-6
267					ベニバナヒョウタンボク		VU			6-7
268					エゾニワトコ					5
269					ガマズミ					5-6
270					ミヤマガマズミ					6
271					カンボク					6
272				オミナエシ科	オミナエシ					8-9
273					オトコエシ					8-9
274	キキョウ科	ツリガネニンジン					8-9			
275		ツルニンジン					7-8			
276		バアソブ		VU			7-8			
277		サワギキョウ					8-9			
278	キク科	キタノコギリソウ					7-9			
279		ヤマハハコ					7-9			

植物目録 (9/14)

No.	名 分 類			科 名	種 名	環R	北R	北B	開花時期		
280	被子植物	双子葉植物	合弁花類	キク科	オトコヨモギ				8-10		
281					シロヨモギ				7-9		
282					オオヨモギ				8-10		
283					エゾノコンギク				8-10		
284					ネバリノギク				A3	8-9	
285					ユウゼンギク				A3	9-10	
286					エゾゴマナ					8-9	
287					シラヤマギク					8-9	
288					アメリカセンダングサ					A3	8-10
289					ミミコウモリ						7-9
290					ヨブスマソウ						7下-9
291					エゾノサワアザミ						7-8
292					エゾヤマアザミ						8-9
293					オオノアザミ						8下-10
294					フランスギク					A2	6-8
295					ヒメムカシヨモギ					A3	7-10
296					ヒメジョオン					A3	6-10
297					ヘラバヒメジョオン					B	6-10
298					ヒヨドリバナ						7-9
299					サワヒヨドリ						8-9
300					カセンソウ						7-8
301					オグルマ						8-9
302					センボンヤリ						5-6
303					アキタブキ						4-5
304					アラゲハンゴンソウ					B	7-9
305					オオハンゴンソウ					A2	8-9
306					ハンゴンソウ						7-9
307					ノボロギク					A3	5-9
308					オオアワダチソウ					A2	7-9
309					セイタカアワダチソウ					A2	8-10
310					アキノキリンソウ						8-10
311	ヤナギタンポポ						8-9				
312	シロバナニガナ						7-8				
313	ハナニガナ						6-8				
314	ハマニガナ						6-9				

植物目録 (10/14)

No.	名 分 類			科 名	種 名	環R	北R	北B	開花時期	
315	被子植物	双子葉植物	合弁花類	キク科	アキノノゲシ				8-9	
316					ヤマニガナ				8	
317					コウゾリナ				7-9	
318					ハチジョウナ				8-9	
319					エゾタンポポ				5-6	
320					セイヨウタンポポ				A2	4-10
321	単子葉植物			オモダカ科	ヘラオモダカ				7-9	
322				ヒルムシロ科	ヒルムシロ				7-8	
323					オヒルムシロ				7-8	
324					センニンモ				7-8	
325					ヤナギモ				7-8	
326					ユリ科	ノビル				6
327				エゾネギ					7-8	
328				ギョウジャニンニク					6-7	
329				キジカクシ					6-7上	
330				スズラン					5下-6	
331				チゴユリ					5-6	
332				オオチゴユリ					6-7	
333				クロユリ				R	6-7	
334				エゾキスゲ					6-8	
335				タチギボウシ					7-8	
336				オオウバユリ					7-8	
337				オニユリ					B	8-9
338				エゾスカシユリ					6-8	
339				マイヅルソウ					5-7	
340				ヒメイズイ					6-7	
341				オオアマドコロ					5中-6	
342				ユキザサ					5-6	
343				ミヤマエンレイソウ					5-6	
344				オオバナノエンレイソウ				5-6		
345				バイケイソウ				6-8		
346				アヤメ科	ノハナショウブ				7-8	
347					カキツバタ		NT		6-7	
348					ヒオウギアヤメ				6-7	
349					アヤメ				6-7	

植物目録 (11/14)

No.	名 分 類		科 名	種 名	環R	北R	北B	開花時期		
350	被子植物	単子葉植物	アヤメ科	キショウブ			A2	6-7		
351			イグサ科	イ (イグサ)					7-9	
352				イヌイ (ヒライ)					7-9	
353				クサイ					7-8	
354				タチコウガイゼキショウ					7-8	
355				アオコウガイゼキショウ					7-8	
356				ハリコウガイゼキショウ					7-8	
357				スズメノヤリ					5-6	
358				ヤマスズメノヒエ					6	
359				ツユクサ科	ツユクサ					8-9
360				ホシクサ科	ニッポンイヌノヒゲ					8-9
361					イトイヌノヒゲ					8-9
362					クロイヌノヒゲ		NT	R		8-9
363				イネ科	ハネガヤ					9
364					コヌカグサ				A3	6-8
365					エゾヌカボ					7
366					スズメノテッポウ					6-7
367					オオアワガエリ				A3	6-7
368					コブナグサ					9-10
369					ハルガヤ				A3	6-7
370					トダシバ					8
371					ホガエリガヤ					6-7
372					ノガリヤス					8-9
373					イワノガリヤス					7-9
374					ヒメノガリヤス					8-9
375					ヤマアワ					7-9
376					カモガヤ				A3	6-8
377					タツノヒゲ					8
378					アキヒメシバ					8-10
379					メヒシバ					8-10
380					イヌビエ					8-9
381					テンキグサ(ハマニンニク)					7-8
382					ノゲシバムギ					7-8
383					オオウシノケグサ				B	6-8
384					オオトボシガラ					7-8

植物目録 (12/14)

No.	名 分 類		科 名	種 名	環R	北R	北B	開花時期			
385	被子植物	単子葉植物	イネ科	ヒロハノドジョウツナギ				8-9			
386				ドジョウツナギ				6-7			
387				エゾノサヤヌカグサ				9-10			
388				コウボウ				5-7			
389				オギ				9下-10			
390				ススキ				8-9			
391				コシノネズミガヤ				8-9			
392				ネズミガヤ				9			
393				ニコゲヌカキビ				B	8-9		
394				クサヨシ					6-7		
395				ヨシ					8-9		
396				ツルヨシ					8-9		
397				スズメノカタビラ					5-10		
398				カラフトイチゴツナギ					7		
399				コイチゴツナギ					B	7-8	
400				ナガハグサ					A3	5-10	
401				アキノエノコログサ						8-9	
402				キンエノコロ						8-9	
403				ムラサキエノコログサ						8-9	
404				ハマエノコロ						8-9	
405				シバ						6	
406				マコモ						8-9	
407				オオクマザサ						6-7	
408				スズタケ						5-6	
409						サトイモ科	ショウブ				7-8
410							マムシグサ				5-6
411							ミズバショウ				4-5
412						ウキクサ科	コウキクサ				7-8
413						ミクリ科	エゾミクリ		R		7-8
414							ミクリ	NT	R		7-8
415							タマミクリ	NT			7-8
416							ヒメミクリ	VU	R		7-8
417						ガマ科	ヒメガマ		R		7-8
418			カヤツリグサ科	クロカワズスゲ				6			
419				ツルスゲ				6			

植物目録 (13/14)

No.	名 分 類		科 名	種 名	環R	北R	北B	開花時期	
420	被子植物	単子葉植物	カヤツリグサ科	オオカワズスゲ				6	
421				コウボウムギ				5-6	
422				ヒカゲスゲ				5-6	
423				ホソバヒカゲスゲ				5-6	
424				ヒメスゲ				6	
425				オオイトスゲ				5-6	
426				チャシバスゲ				5-6	
427				カミカワスゲ				6	
428				イトアオスゲ				6-7	
429				アオスゲ				6	
430				カサスゲ				6	
431				エゾサワスゲ			NT		6-7
432				エナシヒゴクサ					6-7
433				エゾハリスゲ			EN		6
434				マツバスゲ					5
435				ヤチスゲ					6-7
436				ハタベスゲ			EN		6
437				タガネソウ					5
438				コウボウシバ					6
439				オニナルコスゲ					6
440				ビロードスゲ					6
441				オオカサスゲ					6
442				ゴウソ					5-6
443				ヒメゴウソ					5
444				ヤラメスゲ					5-8
445				アゼスゲ					6-7
446				オオアゼスゲ					6-7
447				エゾハリイ					7-8
448				ハリイ					7-8
449				オオヌマハリイ					6-8
450				ヒメハリイ					6-7
451				シカクイ					8
452				ヤマイ					7-8
453				ヒメヒラテンツキ					8-9
454	ウキヤガラ					7-8			

植物目録 (14/14)

No.	名 分 類		科 名	種 名	環R	北R	北B	開花時期	
455	被子植物	単子葉植物	カヤツリグサ科	フトイ				8	
456				ホタルイ				7-8	
457				サンカクイ				7-8	
458				アブラガヤ				7-8	
459				ツルアブラガヤ				8-9	
460				クロアブラガヤ				7-8	
461				ラン科	ヤマトキシウ		En		6-7
462					ネジバナ				7-9
463					トンボソウ				7-8
			86科	463種	17種	10種	44種		
湿原で見られたコケ									
1	コケ植物	蘚類	ミズゴケ科	アオモリミズゴケ					
2			ハイゴケ科	ハイゴケ					

注1:”環R”は環境省のレッドリスト(絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト)のカテゴリーを記した。

2:”北R”は北海道レッドデータブック(希少野生生物リスト)のカテゴリーを記した。

3:”北B”は北海道ブルーリスト(国外・国内外来種リスト)のカテゴリーを記した。

V. 鳥類の調査

はじめに

調査範囲はヨコスト湿原、隣接するヨコスト海岸域とした。

国道周辺や住宅地周辺には雑木林が少し残されている。海岸草原には丈の低い樹木も散在する。沼、草地、海岸域と変化に富んだ環境である。

沼地が点在し、ヨシ、スゲなどに囲まれているため、野生動物が近づかず野鳥たちにとっては良好な環境といえる。観察者としては近寄ることができないため、囀りを手がかりに観察することが多かった。写真撮影に訪れる人の姿がたまに見られたがバードウォッチングのために訪れる人には殆ど会えなかった。オオハクチョウは人の接近を嫌わないがカモ類は人に馴れておらず、近づくとすぐ飛び立ってしまう。一帯は「特定猟具使用禁止区域(猟銃使用禁止区域)」になっている。1983年、湿原を東西に二分する国道「白老バイパス」が竣工した。

諸事情により観察は不定期、時間的な配慮も不十分であった。月によって回数も大きく異なる。もっと足しげく通い、時間も工夫すれば多くの種を見ることができたと思う。

1. 観察された鳥類

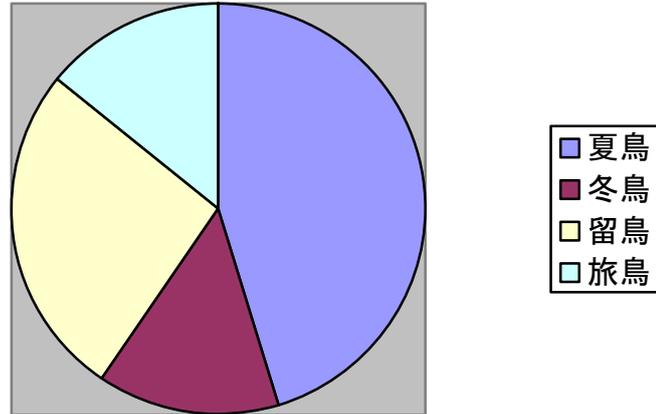
(生息環境の「森」は「森林の鳥」、「川」は「川・湖沼の鳥」、「農」は「農耕地・都市の鳥」、「海」は「海岸、島の鳥」、「草」は「灌木・草原の鳥」「高」は高山の鳥)を表す。)

	種名	種名	生態区分											季節性	生息環境
			観察された月												
			冬	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
1	カイツブリ	カイツブリ		○	○	○	○	○	○	○				夏鳥	川
2	アカエリカイツブリ	カイツブリ			○									夏鳥	川
3	ウミウ	ウ		○										留鳥	川
4	カワウ	ウ			○									夏鳥	川
5	アオサギ	サギ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	夏鳥	川
6	ダイサギ	サギ			○					○	○	○		夏鳥	川
7	チュウサギ	サギ			○									夏鳥	川
8	マガモ	カモ	○	○	○					○	○	○		留鳥	川
9	ヒドリガモ	カモ		○						○	○			冬旅	川
10	クロガモ	カモ		○	○					○	○			冬鳥	海
11	ハシビロガモ	カモ		○										旅鳥	川
12	コガモ	カモ		○	○									冬鳥	川
13	シマアジ	カモ		○										旅鳥	川
14	キンクロハジロ	カモ		○	○					○	○			留鳥	川
15	カルガモ	カモ					○	○	○	○				留鳥	川
16	オオハクチョウ	カモ	○	○						○	○	○		冬鳥	川
17	ホシハジロ	カモ								○				旅冬	川
18	スズガモ	カモ								○				旅冬	川
19	ホオジロガモ	カモ		○										冬鳥	川
20	ホウロクシギ	シギ					○							旅鳥	川
21	チュウシャクシギ	シギ							○	○				旅鳥	川
22	オオジシギ	シギ			○	○	○	○	○					夏鳥	草

23	トウネン	シギ							○					旅鳥	海
24	ウミネコ	カモメ						○	○	○	○			留鳥	海
25	オオセグロカモメ	カモメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		留鳥	海
26	シロカモメ	カモメ		○						○	○			冬鳥	海
27	セグロカモメ	カモメ								○	○			冬鳥	海
28	アオバト	ハト				○	○	○	○					夏鳥	海
29	キジバト	ハト				○	○							夏鳥	草
30	ヤツガシラ	ヤツガシラ		○										旅鳥	草
31	ヒバリ	ヒバリ		○	○	○	○	○	○	○				夏鳥	草
32	ハクセキレイ	セキレイ				○	○	○	○	○				夏鳥	草
33	ノビタキ	ツグミ		○	○	○	○	○	○					夏鳥	草
34	アカハラ	ツグミ				○								夏鳥	草
35	ウグイス	ウグイス				○	○	○						夏鳥	森
36	エブセンニュー	ウグイス				○	○	○						夏鳥	草
37	シマセンニュー	ウグイス				○	○	○						夏鳥	草
38	オオヨシキリ	ウグイス				○	○							夏鳥	草
39	コヨシキリ	ウグイス				○	○	○						夏鳥	草
40	ホオアカ	ホオジロ			○	○	○	○						夏鳥	農
41	オオジュリン	ホオジロ			○	○	○							夏鳥	草
42	アオジ	ホオジロ						○						夏鳥	森
43	カワラヒワ	アトリ			○	○	○	○	○					夏鳥	農
44	ハギマシコ	アトリ	○											冬鳥	高
45	コムクドリ	ムクドリ				○	○	○						夏鳥	農
46	ムクドリ	ムクドリ				○	○	○	○					留鳥	農
47	スズメ	ハタオリドリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		留鳥	農
48	トビ	タカ		○	○	○	○	○	○	○	○	○		留鳥	農
49	チュウヒ	タカ								○				夏鳥	農
50	ノスリ	タカ	○											留鳥	農
51	モズ	モズ					○	○	○					夏鳥	農
52	ハシボソガラス	カラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		留鳥	農
53	ハシブトガラス	カラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		留鳥	農
54	カワセミ	カワセミ					○	○						留鳥	川
55	エブライチョウ	ライチョウ					○							留鳥	森
56	ヒヨドリ	ヒヨドリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		留鳥	農
7	オオバン	クイナ				○								夏鳥	川
58	ウズラ	キジ	○											夏鳥	農
59	キジ	キジ				○	○	○	○	○	○			留鳥	農
60	シジュウカラ	シジュウカラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		留鳥	森
61	イワツバメ	ツバメ						○	○	○				夏鳥	川
62	ショウドウツバメ	ツバメ						○	○	○				夏鳥	川
63	コバシチドリ	チドリ							○					迷鳥	海
64	コミミズク	フクロウ	○											冬鳥	農

- ・過去には観察されていたが今回は未確認の鳥類
クイナ、アマシギ、オジロワシ、オオワシ、ハイイロチュウヒ、シマアオジ、
ハヤブサ、ビロードキンクロ、イソシギ、タシギ、アリスイなどである)
2010年1月～12月に観察された鳥類は28科64種である。渡り区分で見ると、夏鳥 29種、冬鳥9種、留鳥17種、旅鳥8種、迷鳥1である。

渡り区分



月別確認数は、1～3月・・・13 4月・・・23 5月・・・23
6月・・・26 7月・・・31 8月・・・29 9月・・・26 10月・・・29
11月・・・14 12月・・・11である。

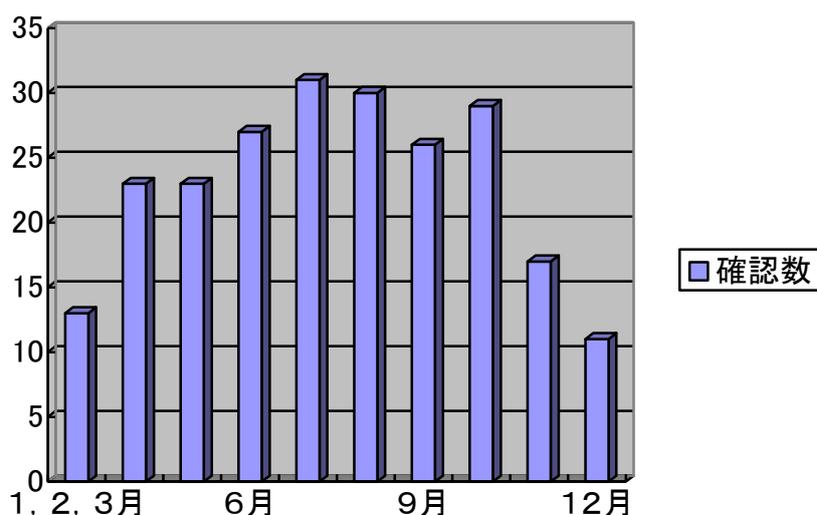
晩秋、夏鳥が去った灌木にシジュウカラが群れを作って飛来している。近づいて見たが木の実は殆ど見当たらず、地衣類やコケをはがして昆虫や卵を探しているようである。冬の食料難の時期、森の鳥が海岸の方まで来て採餌している。木にとっても昆虫の数を減らしてくれることはありがたいことであろう。

アオバトは群れで海水を飲みにやってくる。森にいるときは物悲しい声で鳴くが、群れを成して上空を往来する姿は勇壮である。

「しらおい自然環境基礎調査報告書」では「夏鳥として訪れるアオバトは海水を飲むという習慣があるため、ポロト湖方面の森から海岸域まで頻繁に飛来している。この鳥は樹木の種子を食するため、前に述べた海岸域の植物群の形成に深く関わっていることが考えられる」と記されている。アオバト、カラスなどが森から種子をこの地に播種していることは大変興味深い。

オオハクチョウは4月姿が見られなくなり、10月、幼鳥を伴って戻ってきた。冬期、10羽程がポロト湖方面と往来しながら生息している。

月別確認数



2. 野鳥にとっての湿原環境

温泉の排水が流れ込む一部の沼と、川のほとんどは不凍水域である。カモ類は冬期、数十羽が越冬している。体の大きいアオサギやダイサギ、オオハクチョウが30羽程見られることがあり、これらの鳥の胃袋を満たす食料庫がどういふものなのか興味のあるところである。ヨコスト以外にもポロト湖やポイント沼、ウツナイ川を往復しているが結氷することが多いので食料調達は容易ではないと思われる。

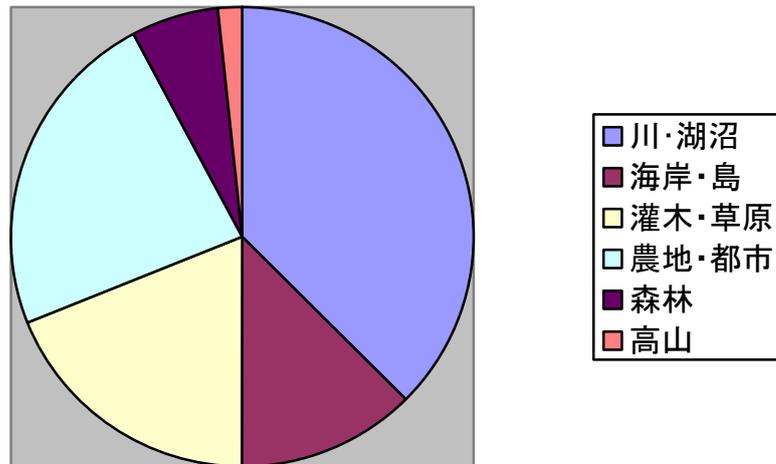
海岸と湿原の境には草地が広がり、かつては牛馬の放牧風景が見られたが、最近では西住宅地寄りに2頭ほど見られる程度である。家畜の糞に昆虫やミミズなどが集まり、そこに野鳥が寄ってきて採餌する環境が野鳥の多様性につながるのではないかと考えられる。

生息環境をグラフ化してみると川・湖沼・海岸・島など「水辺の鳥」が全体の半数を占めている。湿原に隣接する砂浜や草原にも多くの鳥が見られた。

西側に住宅地があり、スズメ、ヒヨドリなど、住宅地を棲家とする鳥が頻りに湿原にも現れ、採餌・水浴びなどをする様子が見られた。

森林の鳥はわずかに残された雑木林を中心に棲息している。

生息場所区分



3. 営巣・繁殖している鳥

草地には高茎植物や灌木が多くある。ススキ、ヨシ、エゾノヨロイグサ、エゾニュウ、アヤメ科、キク科の草本植物やハマナス、エゾノコリンゴなどの灌木など、好みの高さのものを利用して縄張り宣言のソングポストとしている。

樹木は強い潮風の影響で高く伸びられず、横に広がって生長するため、野鳥にとっては巣作りの安全な環境になっている。エゾノコリンゴなどはとげが多く天敵も近づくことができない。

また、海岸近くには流木が多く、ヒバリなどが止まり木として休んだり辺りの様子を伺ったりしている。

野鳥はそれぞれ好みの高さを持っているようで、ヒバリ、オオジュリン、コヨシキリ・・・は低い植物。カワラヒワ、ノビタキは高いところを利用して縄張り宣言をしている。

営巣・繁殖している鳥類：カイツブリ、カルガモ、オオジシギ、キジバト、ヒバリ、ノビタキ、シマセンニュウ、エゾセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ、ホオアカ、オオジュリン、アオジ、カワラヒワ、ムクドリ、コムクドリ、モズ、オオバン、ハシブトガラス、ハシボソガラス

晩秋から初冬、葉が落ちた湿原に役目を終えた巣が枝の間に、数個見られた。精巧で頑丈な巣が風雨にさらされながらもしっかりとくっついている。

- ・オオジシギが1つがい営巣し、繁殖に成功したと思われる。

北海道が主要な繁殖地で、本州では高原の草地で局所的に繁殖するのみといわれる。白老町内においてもディスプレイ・フライトが観察される環境は年々少なくなっている。

- ・カイツブリ 1つがいの営巣が観察された。巣は雄が沼に水草を積み上げた浮巣を4個作り、気に入った巣を雌が選択して使っている。抱卵は雌雄交代で行い、巣を離れるときは草を卵に乗せて隠す。ヒナは3羽ほど見られた。日中は殆ど見ることができないが薄暮時、夕日に照らされて親が付き添い泳いでいる様子が見られた。親の背中に乗っている雛も撮影されている。今年は無事に巣立ったのは1羽のみであった。カラスなどの天敵に襲われてしまうようだ。

- ・ヒバリ 草地で一番目立ったのはヒバリである。早春からさえずり、10つが

い程営巣していた。各地でヒバリが少なくなったといわれる中、ここでは健闘していた。秋遅くまで、他の鳥が姿を消してからも見られた。

4. 海と陸の往来

海がしけた時はカモメが湿原の方に移動して、飛んだり休んだりしている様子が見られた。また、普通の日でもカモ類の集まる場所で羽を休めていることもある。9月に数日続けてウミネコが湿原の空を大乱舞していたことがあった。

少数のハシボソガラスが消波ブロックに止まり、波に打ち上げられる貝（シロガイなど）を見つけると湿原の草地に運んで来て食べる。草地の上にはたくさんの貝殻が散乱している。海岸ではハシブトガラスは見られなかった。魚の死骸に集まるのもハシボソガラスであり、ハシブトガラスは海岸の方にはあまり近づかないように思われる。

アカエリカイツブリの営巣は確認できなかった。この鳥は繁殖時には淡水域にいますが、非繁殖時には海域で採餌するという。カルガモ、キンクロハジロ、ハシビロガモ、ホオジロガモ、スズガモなどは沼を中心にして海のほうにも行っている。クロガモは海にすることが多いが時折、沼にもやってくる。春先、靄のかかった海のほうからピー ピーとこの鳥の声が響き渡ってくるのは心が安らぐ。

この周辺は鳥たちにとってヨコスト湿原・ヨコスト海岸という2つの環境が隣接した快適で便利な生活の場となっているように思われる。

5. 渡りの中継地

4月18日、車を止めたすぐそばにヤツガシラが1羽いた。すぐに姿を隠してしまい、しばらく探したが見られなくなった。残念ながらカメラを持っていなかった。それから何日も通ったが見つけれなかった。渡りの途中の1～2日程度の短い休憩だったのだろう。白老町萩野で数年前秋の渡り途中、偶然に見つけられ撮影されている。

9月10日、砂浜にチドリの仲間と思われる数羽の鳥が見られ、撮影された。トウネンの小群の傍に、見慣れない鳥が写っている。遠距離で写真が鮮明でないため、図鑑で調べてもわからない。北海道の野鳥に関する図鑑は全部調べてみたが載っていない。日本野鳥の会に問い合わせると「コバシチドリ」ではないかということであった。これは、道内でも極めて珍しく、数年に1度ぐらいしか見られない。幼鳥と思われる。今年誕生した1羽が、親から離れてトウネンに混じって南方に渡るのではないかと想像してみる。

春・秋には上空を渡っていると思われる野鳥の群れが度々見られる。ここは渡りの中継地として重要な役割を果たしているのではないか。

6. 希少種

観察された野鳥のうち、環境省や北海道が絶滅の恐れのある種としているのは次の通りである。

注：「環境省」「北海道」の欄は環境省と北海道のレッドリストのカテゴリーを示す。

	種名	環境省	北海道
1	チュウヒ	絶滅危惧 IB 類 (EN)	絶滅危急種 (Vu)
2	ウズラ	準絶滅危惧 (NT)	希少種 (R)
3	オオジシギ	準絶滅危惧 (NT)	希少種 (R)

4	チュウサギ	準絶滅危惧 (NT)	希少種 (R)
5	ホウロクシギ	絶滅危惧 II 類 (VU)	希少種 (R)
6	エゾライチョウ	情報不足 (DD)	希少種 (R)

(カワセミ、ハギマシコも保護上、重要な種とされている)

湿原のハンター「チュウヒ」は営巣しておらず、時折飛来して数日たつと見えなくなった。短期滞在型である。日本で唯一、ヨシ原で繁殖する鳥である。

日本野鳥の会の調査によれば、国内での繁殖つがい数は 60 つがい前後、繁殖地は 15 か所程度という。勇払原野では昨年繁殖成功した営巣地が今年は映画ロケ地になっており消失した。この広いヨシ群落は湿原生態系の頂点に立つチュウヒにとって棲み良い環境と映ったことを願っている。

終わりに

平成 2 年度「白老町自然環境基礎調査報告書」(しらおい自然研究会) では 22 科 51 種が確認されている。その時から 20 年を経過したが、その間の変化を捉える程の調査には至らなかった。それでも平成 22 年 1 年間の、湿原の野鳥たちの姿を記した記録となって残されていくことを願っている。今後、10 年、20 年経過した時、この観察記録がよい方に書き換えられることを願っている。

平成 22 年、「生物多様性条約締約国会議(COP10)」が名古屋で開催され不十分ながら、国際的な取り組みの機運が高まっている。この小さな湿原も生き物たちの生命の営みがいつまでも続く環境であって欲しい。

今回、不十分ながら関係者のご指導・ご協力のもと、ひとつの報告書に仕上がったことに感謝・お礼申し上げます。

(観察・記録は菅原弘行、中野嘉陽 写真は菅原弘行)

VI. 昆虫類の調査

1. 調査方法

捕集は主に捕虫網で行い、たまには管ビンで採集した。ゴミムシなどの地上歩行性の虫は、ベイトトラップ法（誘引剤の食酢を紙コップに入れ地面と平らに埋めて、コップに落ちた昆虫を採集）で行った。トンボやチョウはその場で確認できたら放した。標本は重複しないよう心がけた。真夏は回数が少なく、特に東高校裏の雑木林はカが多く十分にはできず、従って森林性の昆虫は少ししか確認できなかった。

2. 調査結果

確認された種は、9目69科209種であった。

環境省と北海道が絶滅の恐れがある種として選定した8種が含まれていた。

注：「環境省」「北海道」の欄は環境省と北海道のレッドリストのカテゴリーを示す。

No.	種名	科名	環境省	北海道
1	セスジイトンボ	イトンボ科		希少種(R)
2	マダラヤンマ	ヤンマ科		希少種(R)
3	マイコアカネ	トンボ科		希少種(R)
4	オオコオイムシ	コオイムシ科		希少種(R)
5	ゲンゴロウ	ゲンゴロウ科	準絶滅危惧(NT)	希少種(R)
6	ギンイチモンジセセリ	セセリチョウ科	準絶滅危惧(NT)	留意種(N)
7	ゴマシジミ	シジミチョウ科	絶滅危惧II類(VU)	
8	ウラギンスジヒョウモン	タテハチョウ科	準絶滅危惧(NT)	
	8種	8科	4種	6種

確認された種を目録にまとめ、42～45ページに示した。

全体として、ガ類（34種）とトンボ類（26種）、ハナアブ類（24種）が特に多かったと思う。小型のハエ類やハチ類の多くは同定できかねた。

トンボ目では、8科26種類が確認された。

因みに、仙台陣屋跡では9科33種、ポロト自然休養林では9科26種類が確認されている。3地点だけで見れば、共通して生息している種と、それぞれの地点だけに生息している種があり大変興味深いものがある。一例をあげれば、エゾコヤマトンボはウツナイ川流域の高さ3m以上の木が混み合っている様な薄暗い枝の所で羽化をしていた。因みにその高さは1.5m位の所であった。

コオニヤンマの羽化に立ち会った。朝6時30分、ヤゴが水面に顔を出して回りの様子を確認しながら上陸する場所を決める。水面から20～30cm位の所で足場を固め羽化を始める。上陸から5時間後に羽根が乾きホバリングを始める。5分位の間に飛び立つのである。

成虫で越冬するというオツネトンボや、北海道の希少種であるセスジイトトンボ、マイコアカネ、マダラヤンマが見られた。

バッタ目ではウスイロササキリやナキイナゴがおり、シバズ、エゾスズも確認できた。

カメムシ目では、オオコオイムシ（北海道の希少種）やテンキグサの葉鞘にコバネナガカメムシ（体長4mm）がいた。他にも今回未確認の種が多く生息していると思われる。

甲虫類ではゲンゴロウ（環境省準絶滅危惧種）が確認できた。ヨコスト川の海岸部にはその仲間が生息していると思われる。ゲンゴロウの仲間には希少種が多い。調査してみてはどうだろう。砂浜の流木の下にゴミムシ類やホソクビキマワリがいた。更に、ゴミムシ類・カミキリムシ類・ハムシ類などで未確認のものが多く生息していると思う。

ハエ目ではユウゼンギクの花に多くのハナアブ類がいた。ヤドリバエ類・メバエ類で同定できかねたものもある。

チョウ目ではギンイチモンジセセリ・ウラギンスジヒョウモン（共に環境省準絶滅危惧種）、ゴマシジミ（環境省絶滅危惧種Ⅱ類）などがおり、渡りをするというイチモンジセセリが、9月末頃から多く見られた。

ガ類では色彩（シロスジキンウワバ・オオヒサゴキンウワバ・カノコガ）や、模様（マダラミズノメイガ・ヒトツメカギバ）など、味のあるものが見られた。

ハチ目ではオオモンツチバチや、セイヨウミツバチ（10月末）も見られた。セイヨウオオマルハナバチは確認されなかった。

3. 考察

初夏から秋まで、多くのトンボを観察することができた。特に秋の沼や湿原の水辺では、命をつなぐ様子や命を全うした姿に感動と季節の移ろいを感じた。

トンボの生息環境を図鑑で調べてみた。

山地に生息する一部を除くと、平地の溪流・林内の湿地や沼・池沼・湿地・扇状地の砂泥底の緩やかな流れ・砂礫底の河川・木立がある池沼・平地の比較的大きな湖沼・水面が多くヨシやガマで覆われている湿地や池沼や水路 etc.

これらは自然度の高い池沼や川や湿原と考えられ、生息環境はいずれも減少していると推測される。ヨコスト湿原は、仙台陣屋跡やポロト自然休養林と共に、重要なトンボの生息地と考えられる。

ヨコスト川の海岸部で、エゾホトケ（北海道及び環境省絶滅危惧種En）、イバラトミヨ（淡水魚）を調査中にたまたま確認できたので記しておく。

執筆：相吉正亮 谷口勇五郎

昆虫類目録 (1/4)

No.	目名	科名	種名	北R	環R
1	トンボ目	カワトンボ科	ニホンカワトンボ(ヒガシカワトンボ)		
2		アオイトトンボ科	エゾアオイトトンボ		
3			アオイトトンボ		
4			オツネイトンボ		
5		イトトンボ科	エゾイトトンボ		
6			キタイトトンボ		
7			セスジイトトンボ	R	
8			クロイトトンボ		
9		サナエトンボ科	コオニヤンマ		
10			コサナエ		
11			ホンサナエ		
12		オニヤンマ科	オニヤンマ		
13		ヤンマ科	ルリボシヤンマ		
14			オオルリボシヤンマ		
15			マダラヤンマ	R	
16			ギンヤンマ		
17		エゾトンボ科	エゾコヤマトンボ		
18		トンボ科	アキアカネ		
19			マユタテアカネ		
20			マイコアカネ	R	
21			キトンボ		
22			ノシメトンボ		
23			ウスバキトンボ		
24			シオカラトンボ		
25			シオヤトンボ		
26			ヨツボシトンボ		
27	バッタ目		キリギリス科	ハネナガキリギリス	
28		ツユムシ			
29		エゾツユムシ			
30		ウスイロササキリ			
31		コオロギ科	マダラスズ		
32			シバスズ		
33			エズスズ		
34			カンタン		
35		バッタ科	ヒナバッタ		
36			コバネイナゴ		
37	ナキイナゴ				
38	ヒシバッタ科	ヒシバッタ			
39	ハサミムシ目	マルムネハサミムシ科	ハマベハサミムシ		
40		クヌギハサミムシ科	エゾハサミムシ		
41	カメムシ目	アワフキムシ科	マルアワフキ		
42			コガシラアワフキ		
43		ヨコバイ科	オオヨコバイ		
44			マエジロオオヨコバイ		
45			フタテンオオヨコバイ		
46		コオイムシ科	オオコオイムシ	R	
47		タイコウチ科	ミズカマキリ		
48		ミズムシ科	ミズムシ		
49		アメンボ科	アメンボ		
50			セアカアメンボ		
51			ヒメアメンボ		
52			ヤスマツアメンボ		
53		マツモムシ科	マツモムシ		
54		カスミカメムシ科	ムモンミドリカスミカメ		
55			フタトゲムギカスミカメ		
56		マキバサシガメ科	ハネナガマキバサシガメ		

昆虫類目録 (2/4)

No.	目名	科名	種名	北R	環R		
57	カメムシ目	ナガカメムシ科	エチゴヒメナガカメムシ				
58			コバネナガカメムシ				
59		カメムシ科	オオトゲシラホシカメムシ				
60	アミメカゲロウ目	クサカゲロウ科	クモンクサカゲロウ				
61	甲虫目	オサムシ科	エゾアカガネオサムシ				
62			エゾクロナガオサムシ				
63			エゾマイマイカブリ				
64			メダカチビカワゴミムシ				
65			カギモンミズギワゴミムシ				
66			クロオオナガゴミムシ				
67			ツンベルグナガゴミムシ				
68			アオゴミムシ				
69			コヨツボシゴミムシ				
70			ハラアカモリヒラタゴミムシ				
71			オオクロナガゴミムシ				
72			コツブゲンゴロウ科	コツブゲンゴロウ			
73			ゲンゴロウ科	ヒメゲンゴロウ			
74				キベリクロヒメゲンゴロウ			
75				コシマゲンゴロウ			
76				ゲンゴロウ	R	NT	
77			ガムシ科		ガムシ		
78					スジヒメガムシ		
79			シデムシ科		オオヒラタシデムシ		
80			コガネムシ科		スジコガネ		
81					マメコガネ		
82	ハナムグリ						
83	アオハナムグリ						
84	カバイロアシナガコガネ						
85	センチコガネ						
86	ホタル科				ヘイケボタル		
87			オバボタル				
88	ケシキスイ科		コクロチビハナケシキスイ				
89	テントウムシ科		ナナホシテントウ				
90	ゴミムシダマシ科		ホソクビキマワリ				
91			ホソスナゴミムシダマシ				
92			コスナゴミムシダマシ				
93			カミキリモドキ科	キバネカミキリモドキ			
94	ハムシ科		ハッカハムシ				
95			ハンノキハムシ				
96			ドロノキハムシ				
97			ウリハムシモドキ				
98			オオキイロノミハムシ				
99			チャイロサルハムシ				
100			アザミオオハムシ				
101			イチゴハムシ				
102			ジンガサハムシ				
103			ゾウムシ科		ヤナギシリジロゾウムシ		
104	ハエ目	ガガンボ科	ウスナミガタガガンボ				
105		カ科	チシマヤブカ				
106		ミズアブ科	コウカアブ				
107		ムシヒキアブ科		トラフムシヒキ			
108				チャイロムシヒキ			
109		ミバエ科		ワモンハマダラミバエ			
110				ヨモギハマダラミバエ			
111		ハナアブ科		キイロナミホシヒラタアブ			
112				フタホシヒラタアブ			

昆虫類目録 (3/4)

No.	目名	科名	種名	北R	環R		
113	ハエ目	ハナアブ科	シバカワオビヒラタアブ				
114			ヘリヒラタアブ				
115			チャバネクチグロヒラタアブ				
116			ホソヒラタアブ				
117			キタヒメヒラタアブ				
118			ホシツヤヒラタアブ				
119			キアシマメヒラタアブ				
120			サッポロヒゲナガハナアブ				
121			ヒゲナガハナアブ				
122			キスネクロハナアブ				
123			シロスジベッコウハナアブ				
124			モモブトチビハナアブ				
125			オオハナアブ				
126			ハナアブ				
127			シマハナアブ				
128			ホシメハナアブ				
129			キカオアシブトハナアブ				
130			キベリアシブトハナアブ				
131			シマアシブトハナアブ				
132			ニトベナガハナアブ				
133			スズキナガハナアブ				
134			ハナダカハナアブ				
135			フンバエ科	ヒメフンバエ			
136			ヤドリバエ科	セスジナガハリバエ			
137			クロバエ科	キンバエ			
138				ルリキンバエ			
139				オオクロバエ			
140				ミヤマクロバエ			
141				オビキンバエ			
142				ニクバエ科	ナミニクバエ		
143				シリグロニクバエ			
144			チョウ目	セセリチョウ科	コキマダラセセリ		
145					イチモンジセセリ		
146					ギンイチモンジセセリ	N	NT
147	アゲハチョウ科	キアゲハ					
148	シロチョウ科	モンキチョウ					
149		モンシロチョウ					
150		オオモンシロチョウ					
151		エゾスジグロシロチョウ					
152	シジミチョウ科	ルリシジミ					
153		ゴマシジミ			VU		
154		ベニシジミ					
155	タテハチョウ科	アカタテハ					
156		ヒメアカタテハ					
157		クジャクチョウ					
158		フタスジチョウ					
159		ウラギンヒョウモン					
160		コヒョウモン					
161		ヒョウモンチョウ					
162		ウラギンスジヒョウモン			NT		
163		ミドリヒョウモン					
164		ヒメウラナミジャノメ					
165		クロヒカゲ					
166		ジャノメチョウ					
167		トリバガ科		ナカノホソトリバ			
168	メイガ科	シロスジツトガ					

昆虫類目録 (4/4)

No.	目名	科名	種名	北R	環R
169	チョウ目	メイガ科	マダラミズノメイガ		
170			ワモンノメイガ		
171			クロミヤクキノメイガ		
172			マエアカスカシノメイガ		
173			マメノメイガ		
174			ホソミスジノメイガ		
175			シロオビノメイガ		
176			コブノメイガ		
177		シャクガ科	ウラクロスジシロヒメシャク		
178			ベニヒメシャク		
179			シラナミナミシャク		
180			フタシロスジナミシャク		
181			ヒメマダラエダシャク		
182			ユウマダラエダシャク		
183			クロマダラエダシャク		
184			ヒロオビトンボエダシャク		
185			キバラエダシャク		
186			フタテンエダシャク		
187		シダエダシャク			
188		カギバガ科	ヒトツメカギバ		
189	カレハガ科	オビカレハ			
190	ドクガ科	ドクガ			
191	ヒトリガ科	ヒトリガ			
192	ヤガ科	オオフタオビキョトウ			
193		ギンツマキリョトウ			
194		ミツモンキンウワバ			
195		シロスジキンウワバ			
196		オオヒサゴキンウワバ			
197		クビグロクチバ			
198		ヒメコブヒゲアツバ			
199	カノコガ科	カノコガ			
200	スズメガ科	コスズメ			
201	ハチ目	ハバチ科	セグロカブラハバチ		
202		アリ科	クロヤマアリ		
203			ハヤシケアリ		
204			クロクサアリ		
205			トビイロケアリ		
206			ツチバチ科	オオモンツチバチ	
207		スズメバチ科	ケブカスズメバチ		
208		ミツバチ科	エゾオオマルハナバチ		
209			セイヨウミツバチ		
		9目	69科	209種	6種

注1: "北R"は北海道レッドリスト(希少野生生物リスト)のカテゴリーを記した。

2: "環R"は環境省のレッドリスト(絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト)のカテゴリーを記した。

第3章 まとめ

I. 考察

かつて湿原や湿地は、役に立たない不毛の土地として見向きもされなかった。近年、その保水力の高さや水質浄化機能、比較的自然性が高い状態で様々な植生のタイプが存在することなど、生物多様性維持の観点から、さらに、渡り鳥の中継地・生息地としても、湿原・湿地の保全の重要性に対する認識が国内外で高まってきている。又、最新の研究により、オホーツクの豊かな海は、「巨大魚付林」アムール川流域の森林と、湿原から供給される溶存鉄により支えられている事が明らかにされつつあり、森と川と海と、そして湿原のつながりが重要である事が判ってきた。「食材王国」を標榜する白老町としては、注目すべきことだろう。

本調査によっても、ヨコスト湿原には絶滅の恐れがある種を含む多くの植物や昆虫類が生育している事が判り、野鳥にとっては、渡りの中継地、繁殖地、越冬地でもあることも確認することができた。国や北海道が選定した絶滅の恐れがある動植物は、それらが生育する自然環境が減少しているからに他ならない。

北海道の湿原劣化の典型は、湿原を取り囲む排水路によって湿原の地下水位が低下し、乾燥化が進行することであるとされている。それは北海道の開発の歴史とも言える。23年前の1987年（昭和62年）、ヨコスト湿原の8割近くが干上がり、マルタニシ、カラス貝の多くが死に、見るも無残な光景が広がっていた。当時は、1983年（昭和58年）に開通した白老バイパスが原因ではないかと言う人もいたが定かではない。ポロト湖の上流から来るウツナイ川とヨコスト川によって湿原は形成されていると言われてきたが、ウツナイ川は東の端を流れて直接ヨコスト川につながっており、湿原には殆ど流入していない。不安定な雨水と、住宅地からの温泉の排水によって辛うじて維持されている。

1962年（昭和37年）の航空写真を見ると、ウツナイ川と思われる川が湿原のほぼ中央から流入し、複雑に蛇行して湿原を潤しながら東端の海岸付近でヨコスト川へ合流している様子がうかがえる。当時の植生について知ることができなかったので推測する。ヨコスト川と石像下の沼には、絶滅の恐れがある種を含む沼沢湿原植物が多く分布している。ウツナイ川（推定）が涸れた事による影響が少ない部分であり、当時の植生が比較的維持されているものと推測される。湿原のかなりの部分は乾燥化が進みつつあるように見える。帰化植物であるユウゼンギクとオオアワダチソウが、沼沢地などを除く多くの植物群落で分布を拡大しつつあり、今後さらに、湿原の乾燥化を加速していくところが懸念される。

今、ヨコスト湿原は「早期の積極的な保全」を訴えかけていると強く感じた。「豊かな自然」は白老町の大きな魅力であり、町民の誇りである。ヨコスト湿原は、市街地のすぐ近くで美しい景観を楽しみながら、湿原とそこに棲む生き物や植物の営みについて学べる場である。

この報告を機会として、自然を大切に考える多くの方々がヨコスト湿原を訪れていただける事を願っている。そのことが湿原の価値をさらに高め、保全につながることを切に望んでやまない。

この湿原の変遷を理解し「積極的な保全」を考えるにあたって、多くの手がかりを与えてくれるであろう3枚の航空写真を次頁以降に添付した。



1962年（昭和37年）の航空写真



1980年（昭和55年）の航空写真



最近の航空写真

II. まとめ

今回の調査で、ヨコスト湿原の地形及び植生が把握できたことから、生息する植物、鳥類、昆虫などが確認できた。

いずれも、想定していた種類より多く、希少種もあることから、さらに詳細な自然環境調査が必要であるとともにヨコスト湿原の形状を継続的に把握するとともに、ポロト湖の水質が悪化する兆しがあることから流入河川及び流出河川の水死地調査を実施することが重要と考える。

報告書の今後の活用としては、白老町環境基本計画のヨコスト湿原の自然環境調査結果報告とし、保全の必要性について検討する際の基礎資料とするとともに、ヨコスト湿原及びその周辺地域の自然環境保全のあり方について、広く町民の方々や白老町環境町民会議や白老町環境審議会などで議論する際の基礎資料として活用する。

また、本報告書に掲載されている写真等の資料については、学校教育や環境学習の資料として有効に活用する。

今回の調査ならびに報告は、これまで湿原の保全を訴えて活動された皆様のご努力と、多くの方々のご指導・ご協力無くしてはあり得なかったと強く感じているところです。皆様に心から感謝申し上げます。

III. 引用及び参考文献等

- 滝田謙讓, 2001, 北海道植物図譜 自費出版
牧野富太郎, 1972, 牧野新日本植物図鑑, 北隆館
梅沢 俊, 2007, 新北海道の花, 北海道大学出版会
辻井達一・橘ヒサ子, 2003, 北海道の湿原と植物, 北海道大学出版会
佐藤孝夫, 1990, 北海道樹木図鑑, 亜璃西社
大井次三郎, 1972, 日本植物誌「シダ編」, 至文堂
田川基二, 1958, 原色日本羊歯植物図鑑, 保育社
岩槻邦男, 1995, 日本の野生植物 シダ, 平凡社
榊原茂樹, 1998, ヨコスト湿原の顕花植物
 (しらおいの自然 白老水と緑のネットワーク自然環境調査報告集 1998 年版)
「北海道野鳥図鑑」(亜璃西社)
「北海道の野鳥」(北海道新聞社)
「北海道野鳥ハンディガイド」(北海道新聞社)
「鳥 630 図鑑」(日本鳥類保護連盟)
「野鳥観察ハンディ図鑑 新山野の鳥」(日本野鳥の会)
「野鳥観察ハンディ図鑑 新水辺の鳥」(日本野鳥の会)
「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」(山と溪谷社)
「支笏湖の人と自然」(支笏湖の水とチップの会)
「北海道野鳥だより」(北海道野鳥愛護会)
「千歳市史」(調査方法、まとめ方を大変参考にさせていただきました)
「白老町自然環境基礎調査報告書」(しらおい自然研究会)
木野田君公, 2006, 札幌の昆虫, 北海道大学出版会
伊藤修四郎・奥谷禎一・日浦勇編, 原色日本昆虫図鑑 (下), 保育社
森本桂・林長閑・黒沢良彦・上野俊一・佐藤正孝・久松定成・佐々治寛之・林匡夫・
 木元新作, 原色日本甲虫図鑑 (I~IV), 保育社
伊藤誠夫他, 原色昆虫図鑑 (I~II) コンパクト版, 北隆館
朝比奈正二郎他, 原色昆虫大図鑑 (第III巻), 北隆館
二橋愛次郎, 2002, 北海道のトンボ, エコ・ネットワーク
広瀬良宏・横山透・伊藤智, 2007, 北海道のトンボ図鑑, いかだ社
伊藤年一, 日本産アリ類全種図鑑, 学習研究社
鷺谷いづみ ほか, 1997, マルハナバチ・ハンドブック, 文一総合出版
寺山守・久保田敏, 2009, アリ ハンドブック, 文一総合出版
松浦誠, 1984, スズメバチはなぜ刺すか, 北海道大学図書刊行会
白老町町史編さん委員会, 1992, 新白老町史 白老町
北海道環境科学研究センター, 1993, 「すぐれた自然地域」自然環境調査報告書
 道南圏域 道央圏域 第10節ポロト沼周辺
富士田裕子, 2007, 北海道の湿原生態系とその保全・再生 地球環境 Vol.12
岩熊敏夫, 1992, 湿原の環境変化に伴う生物群集の変遷と生態系の安定化維持機構
 に関する研究, 独立行政法人国立環境研究所ニュース 3号

富所康子・浅川 昭一郎・松島 肇, 2005, 北海道胆振地域の湿原景観に対する印象と評価 ランドスケープ研究, Vol. 68 No. 5, 787-790, (2005)

環境省 生物多様性情報システム, 絶滅危惧種情報
http://www.biodic.go.jp/rdb/rdb_top.html

北海道ホームページ 北海道レッドデータブック
<http://rdb.hokkaido-ies.go.jp/>

北海道ホームページ 北海道湿原保全マスタープラン
http://www.hokkaido-ies.go.jp/seisakuka/gyosei_shiryo/html/08master.html#1-1

国立環境研究所 国立環境研究所ニュース
<http://www.nies.go.jp/kanko/news/index.html>

産業技術総合研究所 研究情報公開データベース 有珠火山地質図 解説
<http://riodb02.ibase.aist.go.jp/db099/volcmap/02/text/text.html>

北海道開発局ホームページ 胆振海岸
<http://www.city.tomakomai.hokkaido.jp/kasen/iburi-kaigan.htm>

アムール・オホーツクプロジェクト ホームページ
<http://www.chikyu.ac.jp/AMORE/index.htm>

ヨコスト湿原自然環境調査報告書

発行月／平成23年1月

発行／北海道白老郡白老町

〒059-0995

北海道白老郡白老町大町1丁目1番1号

TEL 0144-82-2265

FAX 0144-82-4391
